

2025 年度修士論文

世界の舞台を目指すバレエダンサーの
キャリア形成を支える教育方針の提案

Proposal of Guidelines to Support the Career
Development of Aspiring Ballet Dancers

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 トップスポーツマネジメントコース

5024A309

中濱 瑛

Akira Nakahama

研究指導教員 平田 竹男教授

目次

第1章 背景	1
第1節 バレエダンサーの起源	1
第2節 バレエダンサーの育成とメソッドの普及	1
第3節 コンクール創設による新たなキャリアパス	2
第4節 日本人バレエダンサーのキャリアの課題	3
第5節 本研究の問題意識	4
第6節 筆者の立場と問題意識	5
第7節 先行研究	6
第8節 目的	7
第2章 方法	8
第1節 用語の定義	8
第2節 世界の主要バレエ団に所属するダンサーのキャリア調査	9
第1項 対象	9
第2項 各バレエ団所属ダンサーの文献調査	10
第3項 シンガポールバレエ所属ダンサーの文献調査とアンケート調査	11
第4項 世界トップクラスのバレエ団に所属した経験を持つ日本人ダンサーへのインタビュー調査	11
第3節 世界のコンクールとバレエ団の関係性	11
第4節 指導方法と指導者育成プログラムの文献調査とインタビュー調査	12
第1項 指導方法	12
第2項 バレエ学校の進級試験や教育プログラム	12
第3項 指導者育成方法	12
第5節 他競技の育成方法と指導者育成方法	12
第1項 他競技の育成方法	12
第2項 他競技の指導者育成方法	13
第6節 倫理的配慮	13
第3章 結果	14
第1節 世界のバレエ団所属ダンサーの出身地と出身校の分析	14

第1項	ロイヤル・バレエ団	14
第2項	パリ・オペラ座バレエ団	16
第3項	マリインスキー・バレエ	17
第4項	オーストラリア・バレエ団	18
第5項	香港バレエ	20
第6項	シンガポールバレエ	22
第7項	出身校と出身のまとめ	23
第2節	シンガポールバレエ所属ダンサーのアンケート調査結果	26
第1項	バレエの開始年齢と留学した年齢	26
第2項	幼少期のバレエメソッド	26
第3項	バレエ学校の入学経緯と在学中の課題	27
第4項	シンガポールバレエの入団経緯	28
第3節	世界のバレエ団に所属する日本人ダンサーの経歴調査結果	28
第1項	バレエの開始年齢と留学した年齢	28
第2項	バレエ学校進学の原因と入学経緯	28
第3項	バレエ学校在学中の課題	29
第4節	ローザンヌ国際バレエコンクールと YAGP の特徴	30
第1項	ローザンヌ国際バレエコンクールと YAGP の特徴	30
第2項	ローザンヌ国際バレエコンクールの入賞者	31
第3項	YAGP 入賞者	32
第4項	コンクール入賞者とバレエ団入団の関係	41
第5節	世界トップクラスのバレエ団に所属した経験を持つ日本人バレエダンサーのインタビュー調査	41
第1項	飯島望未（元ヒューストン・バレエ、現 K Ballet Tokyo）	41
第2項	根本里菜（オーストラリア・バレエ団）	42
第3項	石井久美子（マリインスキー・バレエ）	43
第4項	3 人の特徴	44
第6節	バレエメソッドと指導者育成プログラム	47
第1項	バレエメソッドの特徴	47
第2項	世界のバレエ学校と日本のバレエ教室の比較	48
第3項	世界のバレエ学校の進級試験	49
第4項	ロイヤル・ウィニペグバレエ学校の進級試験の評価方法	49
第5項	指導者育成の方法	50
第6項	他競技との比較とバレエ教育の応用	51

第4章 考察	54
第1節 幼少期の教育方針	54
第1項 バレエメソッドを取り入れる事の重要性.....	54
第2項 他競技にも役立つ要素	55
第2節 日本からトップダンサーを輩出するために求められる要点.....	56
第1項 コンクールの役割と可能性.....	56
第2項 提携校とネットワークの重要性	57
第3節 留学とその後の将来を踏まえた指導	57
第1項 留学準備としての指導と支援.....	57
第2項 留学中のサポート	58
第4節 他競技から学ぶ幼少期の指導方法	58
第1項 他競技の指導法からの応用.....	58
第2項 指導者育成における資格制度の導入	59
第3項 バレエ教育への応用と課題.....	59
第5章 結論	60
謝辞.....	61
文献.....	62

第1章 背景

第1節 バレエダンサーの起源

バレエは16世紀のイタリア・ルネサンス期に宮廷舞踊として誕生し、フランスに渡って発展した舞台芸術である¹⁾。当初は貴族たちが社交の一環として宮廷において盛んに踊られていたが、17世紀にルイ14世がバレエを舞台芸術として確立したとされている。1661年、ルイ14世が王立舞踊アカデミー（Académie Royale de Danse）を設立し、バレエの技術が体系化されたことで、プロフェッショナルなダンサーの養成が始まった。1669年にはパリ・オペラ座の前身となる王立音楽アカデミーの一部となり、1713年にはパリ・オペラ座バレエ学校が創設され、体系的なバレエ教育の基盤が築かれた²⁾。

17世紀後半になると、宮廷の貴族たちが踊るバレエから、舞台芸術としてのバレエへと移行し、専門のバレエダンサーが登場するようになった。1681年には、パリ・オペラ座で女性バレエダンサーが初めて舞台に立ち、バレエが男性貴族の社交的な活動から、職業としてのダンサーによって演じられる芸術へと変化していった。こうして、バレエは王侯貴族の娯楽の枠を超え、専門的な訓練を受けたプロフェッショナルによる舞台芸術として確立されていった。

18世紀に入ると、バレエは劇場芸術としての要素を強め、物語性を持つ舞踊劇が主流となった³⁾。19世紀にはロマン主義の影響を受け、バレエの表現力や技術が飛躍的に発展した時代であった。この時期に生まれた代表的な作品には『ラ・シルフィード』や『ジゼル』があり、軽やかに舞う「トゥ・シューズ」を使用するスタイルが確立された。また、ロシアにおいても古典バレエが発展し、マリウス・プティパによって『白鳥の湖』『眠れる森の美女』『くるみ割り人形』などが創作され、現在でもバレエの代表的な作品として上演され続けている。

第2節 バレエダンサーの育成とメソッドの普及

20世紀に入ると、各国で独自の教育メソッドが確立され、バレエ学校とバレエ団の連携が強化されることで、プロフェッショナルダンサーの育成が体系的に行われるようになった。

フランスではフランス・メソッドが発展し、伝統的な優雅さと洗練された動きを重視する教育体系が確立された。フランス・メソッドは、特にパリ・オペラ座バレエ団の芸術的スタイルに適した訓練法として位置付けられ、正確なフットワークや洗練されたアームス（腕の動き）を特徴とする。

ロシアでは、ワガノワ・メソッド（ロシア・メソッド）が発展し、解剖学的アプローチを重視することで合理的な動作の流れを体系化し、筋肉の使い方を最適化する教育が行われる

ようになった。このメソッドは、ロシアのクラシックバレエの基礎として確立され、マリinsky・バレエ団やボリショイ・バレエ団といった世界的なバレエ団のダンサー育成にも採用されている。

こうしたフランスやロシアでの教育メソッドの確立と並行して、イギリスではバレエ団と教育機関の密接な連携が進んだ。その代表例がロイヤル・バレエ団（The Royal Ballet）である。ロイヤル・バレエ団は、1926年にニネット・ド・ヴァロア（Ninette de Valois）によって設立されたバレエ学校を母体とし、1931年に「ヴィック・ウェルズ・バレエ」として創設されたのち、1956年に「ロイヤル・バレエ団」として正式に認定された。イギリスにおけるバレエの発展に大きな役割を果たし、ロイヤル・バレエ学校（The Royal Ballet School）と密接に連携しながら、バレエ教育とプロフェッショナルダンサーの育成を一体的に行っている。

このように、20世紀以降のバレエは、各国のバレエ団と教育機関の連携によって、プロフェッショナルダンサーの育成が体系的に行われるようになった。各国の教育メソッドは文化的背景や舞踊スタイルに応じて発展し、バレエ団の求める技術や表現に適した形で継承されている。

第3節 コンクール創設による新たなキャリアパス

20世紀にバレエ団とバレエ学校の環境が整備された一方で、バレエ学校で、バレエ団ごとに求められる技術や芸術性に応じた教育を受けたダンサーが、そのままバレエ団に所属するのが一般的なキャリアパスであった。

しかし、1973年にローザンヌ国際バレエコンクールが創設され、若手ダンサーが世界的に才能を認められる機会が生まれた。このコンクールは、単なる競技会ではなく、受賞者が海外の一流バレエ学校で奨学金を得て学ぶ機会を提供するという画期的なシステムを採用した。これにより、それまでバレエ団直結の学校で教育を受けなければプロの舞台に立つことが難しかった状況が変わり、出身国に関係なく才能が評価され、グローバルなキャリアを築く道が開かれた。

さらに、1999年には Youth America Grand Prix（以下 YAGP）が設立され、より若年層のダンサーが早い段階で国際的な舞台へ挑戦できる環境が整った。ローザンヌ国際バレエコンクールや YAGP ではクラシックバレエだけでなくコンテンポラリーダンスのパフォーマンスも評価の対象とすることで、現代バレエの発展にも寄与し、バレエ団の多様なニーズに応える人材を発掘する役割を果たしている。

こうしたコンクールの登場により、日本を含むバレエ学校とバレエ団の関係が希薄な国のダンサーにも、海外の一流バレエ団へ直接つながるルートが確立された。特に、ローザンヌや YAGP など高い評価を受けたダンサーは、世界の主要なバレエ団やバレエ学校からオファーを受ける機会を得ることができるようになった。これは、従来のバレエ教育の枠組みを

超え、国際的な競争の中で実力が認められれば、どの国の出身であってもトップレベルのバレエ団に所属できるシステムが確立されたことを意味する。

実際に、コンクールの創設以降、多くの日本人バレエダンサーが国際舞台で活躍するようになった。ローザンヌや YAGP での評価を契機に、ヨーロッパやアメリカの一流バレエ団に入団する例が増え、日本人ダンサーのキャリアの可能性が飛躍的に拡大した。これまで日本には欧米のようなバレエ団直結の教育機関が存在しなかったが、国際コンクールを通じたルートの確立により、日本のバレエダンサーがグローバルなバレエ市場で競争し、キャリアを築くことが現実的な選択肢となった。

このように、バレエ団とバレエ学校の伝統的な関係を補完し、新たなキャリア形成のルートとして、国際コンクールは現代バレエ界において極めて重要な役割を果たしている。

第4節 日本人バレエダンサーのキャリアの課題

日本におけるバレエ文化は、第二次世界大戦後に本格的に広まり、国内には複数のバレエ団が存在する(表1)。これらのバレエ団は、ヨーロッパやロシアから輸入されたバレエ文化を基盤としながら、日本独自のスタイルを発展させてきた。しかし、世界の主要なバレエ団と比較すると、日本のバレエ団はバレエ学校との連携が確立されておらず、ダンサー育成の体系化が十分に進んでいないという課題を抱えている。

フランスのパリ・オペラ座バレエ団、ロシアのマリインスキー・バレエ団、イギリスのロイヤル・バレエ団などは、それぞれのバレエ団と直結したバレエ学校を持ち、幼少期から特定の教育メソッドを学んだダンサーを継続的に育成・採用する仕組みを確立している。一方、日本においてもバレエ団が運営する育成機関は存在するが、修了しても国際的に認められる卒業資格を取得できる制度が整備されておらず、プロフェッショナルダンサーとしてのキャリアを確立することが難しい状況にある。この点について、「バレエ教育に関する全国調査2021」⁴⁾では、日本のバレエ教育環境の現状と課題を明らかにしている。同調査によれば、日本全国のバレエ教室数は2021年時点で約4,260件と推計されているが、これらのバレエ教室は独立した私的な組織が大半であり、国家資格や統一された指導カリキュラムは存在しない。また、2011年時点で約40万人だったバレエ学習者数は2021年には約25.6万人に減少しており、日本国内におけるバレエ人口の縮小が指摘されている。

その結果、日本人のバレエダンサーがプロとして活動するためには、海外のバレエ学校で学ぶか、国際バレエコンクールで実績を残すことで、海外のバレエ団に所属する必要がある。また、日本の主要なバレエ団においても、海外のバレエ学校やバレエ団で経験を積んだ即戦力の日本人ダンサーを採用する傾向が強い。同調査によると、2021年時点で日本のバレエ教室のうち13.1%が元生徒を海外のバレエ学校に送り、13.0%が元生徒を海外のバレエ団に所属させた経験を持つと回答しており、海外での実績を積んだダンサーの重要性が示されている。

さらに、日本ではバレエ学校を卒業してプロになるというルートがまだ確立されていないため、ダンサー個々のキャリア形成の道筋が体系化されておらず、バレエ指導者やジュニアダンサーにとって明確な指針を得ることが難しい。そのため、世界の主要なバレエ団で活躍するダンサーがどのようなキャリアパスを歩んでいるのかを明らかにし、日本のバレエ指導者やジュニアダンサーが参考にできる知見を提供することが求められる。

表 1 日本の主要バレエ団

バレエ団名	形態	所属ダンサー (人)	特徴
谷桃子バレエ団 ⁵⁾	一般財団法人	68	1949 年設立
東京バレエ団 ⁶⁾	公益財団法人 (日本舞台芸術振興会)	67	1964 年設立
東京シティ・バレエ団 ⁷⁾	公益財団法人	99	1968 年設立
NBA バレエ団 ⁸⁾	一般財団法人	53	1993 年設立 日本バレエアカデミ ーバレエ団の略称
K-BALLET TOKYO ⁹⁾	株式会社	51	1999 年設立
新国立劇場バレエ団 ¹⁰⁾	公益財団法人 (新国立劇場運営財団)	72	2002 年設立 新国立劇場のバレエ 部門

第 5 節 本研究の問題意識

世界には、ロイヤル・バレエ団やパリ・オペラ座バレエ団のような歴史あるバレエ団に加え、オーストラリア・バレエ団やヒューストン・バレエ団のような比較的新しい大規模なバレエ団が存在し、さらに香港バレエ団やシンガポールバレエなど、地域に根ざしたバレエ団も数多く活動している。こうしたバレエ団は、国際的なオーディションを実施し、才能のあるダンサーを世界各国から受け入れている。

また、バレエ学校においても、ロイヤル・バレエ学校やパリ・オペラ座バレエ学校のような著名なバレエ団と提携する学校のほかに、多様な指導方法や教育方針を持つバレエ学校が数多く存在する。Herrera-Guzmán ら¹¹⁾の研究では、YAGP に参加した 6,363 人のバレエ

学生と、彼らに通う 1,603 のバレエ学校を対象に分析を行った。その結果、バレエ学校がバレエ界のネットワーク内で持つ影響力（中心性）が高いほど、その学校の生徒がプロのバレエ団に就職する可能性が高くなることが示された。つまり、主要なバレエ団と強いつながりを持つバレエ学校で学ぶことが、プロへの道を切り開く上で重要な要素となる。

この点を踏まえると、世界のバレエ団に所属するためには、バレエ技術の習得だけでなく、コンクールでの実績を得ることや、主要なバレエ団と強いつながりを持つ学校で学ぶことが極めて重要である。特に、日本のようにバレエ団と教育機関の連携が十分に整っていない国では、国際的なコンクールを通じて実績を積み、海外のバレエ学校やバレエ団へと進むルートが最も確実な方法の一つとなっている。

これまで、多くの日本人ダンサーが世界の舞台で活躍してきたが、そのキャリアパスが体系的に整理されておらず、指導者やジュニアダンサーにとって明確な指針を得ることが難しい。従って、世界で活躍するバレエダンサーはどのようなキャリアを歩んでいるのかを体系的に把握することを主眼とした。

第 6 節 筆者の立場と問題意識

筆者は、中学 1 年生の時にカナダのロイヤル・ウィニペグバレエ学校に入学し、2009 年に卒業した。その後、研修生として米国のワシントン・スクール・オブ・バレエに入学し、2010 年 10 月にシンガポール・ダンス・シアター（現シンガポールバレエ）に研修生として入団し、2012 年に正団員、2019 年にソリストに昇格した。現在は引退しジュニアダンサーの指導に従事している。

筆者のキャリアは、国際的なバレエコンクールでの受賞歴を経ずに、直接バレエ学校にコンタクトを取って入学し、プロフェッショナルダンサーへの道を歩んだ点に特徴がある。一般的に、プロのバレエ団に所属するためには、国際バレエコンクールでの入賞歴を活かしてバレエ学校に進学するルートが主流とされている。しかし、バレエ学校に直接アプローチし、入学審査を受けることで進学するルートも存在する。このようなキャリアパスは、日本国内では十分に認知されておらず、バレエ団のオーディション情報や、各国のバレエ学校が求める基準に関する情報も限られている。

バレエダンサーのキャリア形成において、バレエ学校への進学は重要なステップであるが、その進学経路は一様ではない。国際バレエコンクールを経てバレエ学校に進学するルート、直接バレエ学校に入学するルート、さらにはバレエ学校を経由せずにバレエ団のオーディションを受けて直接プロとして契約するルートなど、さまざまな道が存在する。しかし、これらの多様なキャリアパスについての情報は十分に整理されておらず、ジュニアダンサーが適切な進路を選択するための指針が不足しているのが現状である。したがって、バレエ団に所属するためのキャリアパスだけでなく、バレエ学校に進学する経路についても体系的に可視化することが、今後より多くのジュニアダンサーが世界で活躍できる可能性を広げる上で重要であると考えられる。

第7節 先行研究

バレエダンサーのキャリア形成に関する研究は、これまで主にバレエ学校とバレエ団のネットワーク、プロフェッショナルダンサーのキャリア持続要因、引退後のキャリア移行、バレエの才能発達と育成の観点から進められてきた。近年の研究では、バレエダンサーのキャリアパスが所属するバレエ学校の社会的ネットワークによって大きな影響を受けることが示されている。Herrera-Guzmán ら¹¹⁾ は、アメリカ国内のバレエアカデミー間の階層性と名声がダンサーのキャリア成功に与える影響を分析し、社会的に高い地位を持つバレエ学校の卒業生ほど、プロのバレエ団に所属する確率が高いことを示した。バレエ学校のネットワーク構造が、ダンサーのキャリア成功の指標となることが明らかになり、技術力のみならず、バレエ教育機関の社会的資本がキャリア形成において重要な役割を果たすことが示唆された。しかし、この研究はアメリカ国内のバレエ学校のネットワークに焦点を当てており、国際的な視点からの包括的な分析は行われていない。

バレエダンサーのキャリア持続要因に関する研究も近年進展している。Kim ら¹²⁾ は、引退したプロバレエダンサーへのインタビューを通じて、長くキャリアを持続するための要因を分析した。研究では、メンタルヘルスの維持、主体的なキャリア管理、芸術的成長の継続、バレエ以外の生活の充実という四つの要素がキャリア持続に重要であると指摘された。特に、バレエのキャリアは肉体的制約が大きく、技術的な側面だけでなく、心理的な回復力や戦略的なキャリア形成が必要であることが明らかになった。この研究は、バレエダンサーのキャリア継続のために必要な要素を明らかにしているが、キャリア形成のプロセス自体には十分に言及されておらず、具体的なキャリアパスの分析は不十分である。

一方、バレエダンサーのキャリア形成には、引退後のキャリア移行という課題も存在する。Roncaglia¹³⁾ は、バレエダンサーの引退移行プロセスを分析し、ダンサーがどのようにして新たなキャリアへ適応するかを調査した。研究では、引退後の心理的適応の過程を「内的対処」と「外的対処」に分類し、自己の再構築、新たなキャリア開拓、社会的支援の活用が重要な要素であると指摘している。バレエダンサーは、長年の訓練によって形成されたアイデンティティを持つため、引退後のキャリア移行に困難を抱えやすいことが示された。この研究は、バレエダンサーのキャリア全体を通じた問題を扱っているが、キャリアの初期段階やプロへの移行に関する分析は限定的である。

バレエダンサーの才能発達と育成に関する研究も、キャリア形成において重要な視点を提供している。Walker ら¹⁴⁾ は、バレエにおける才能の識別と育成に関する文献レビューを行い、ダンサーの才能が身体的資質、心理的要因、環境要因の相互作用によって形成されることを明らかにした。特に、適切な指導環境と心理的サポートが、才能の開花とプロフェッショナルなキャリア形成において重要であることが示された。しかし、この研究はバレエの才能育成に焦点を当てたものであり、キャリア形成の社会的要因については十分に議論されていない。

以上のように、バレエダンサーのキャリア形成に関する先行研究は、バレエ学校のネットワークがキャリア成功に与える影響や、キャリア持続のための要因、引退後のキャリア移行、才能の発達と育成について重要な知見を提供している。しかし、これらの研究の多くは、特定の地域（主に欧米）に限定されたものであり、国際的な視点からバレエダンサーのキャリア形成を体系的に分析した研究は不足している。また、バレエダンサーがどのような経歴を経てプロのバレエ団に所属するのか、そのプロセスを実証的に明らかにする研究も十分ではない。

第8節 目的

本研究の目的は、世界の主要なバレエ団所属ダンサーの経歴（出身バレエ学校、コンクール歴、オーディション歴、幼少期に学習したバレエメソッドなど）を踏まえ、ジュニアダンサーを国際的なキャリアへ導くために、バレエ指導者が認識すべき点を明らかにすることである。

従来の研究が、バレエ学校のネットワーク、キャリア持続のための心理的要因、引退後の適応、才能育成といった個別の視点から議論を進めてきたのに対し、本研究はキャリア形成の全体像を体系的に捉え、特に国際的なキャリアパスの実証的分析を行う点で新規性を持つ。また、本研究の成果は、バレエ指導者に対してキャリア形成に関する具体的な指導方針を提供し、ジュニアダンサーやその保護者にとってもキャリアの参考となることが期待される。

第2章 方法

第1節 用語の定義

本研究では、以下の用語について、下記のように定義し使用する。

【バレエ教室】

本研究では、日本国内の地域に点在する町のバレエスタジオや教室を指し、趣味としてのバレエ教育を提供する場を総合して「バレエ教室」と定義する。これにはプロフェッショナルキャリアを目指さない生徒も対象に含める。

【バレエ学校】

本研究では、世界中でプロフェッショナルなバレエダンサーを養成することを目的としたフルタイムの教育機関を「バレエ学校」と定義する。これにはロイヤル・バレエ学校やワガノワ・バレエアカデミーなど、特定のバレエ団と提携する教育機関が含まれる。

【ジュニアダンサー】

本研究においては、プロフェッショナルなバレエ学校に所属しておらず、町のバレエ教室や個人指導を受けている18歳未満の生徒を「ジュニアダンサー」と定義する。

【プロ】

バレエ団に正式に所属し、給与を得てバレエ活動を行っているダンサーを「プロ」と定義する。これにはフルタイムまたはパートタイムの契約形態を問わず含む。

【バレエメソッド】

本研究では、特定の教育方針に基づき、バレエの技術や芸術性を体系的に指導するカリキュラムを「バレエメソッド」と定義する。これにはR.A.D. (Royal Academy of Dance) やロシア・メソッド (ワガノワ・メソッド) が含まれる。

【提携校】

特定のバレエ団と直接的な教育的連携を持ち、卒業生がそのバレエ団への入団を目指すことを前提とした教育機関を「提携校」と定義する。例として、ロイヤル・バレエ学校とロイヤル・バレエ団、ワガノワ・バレエアカデミーとマリインスキー・バレエが挙げられる。

第2節 世界の主要バレエ団に所属するダンサーのキャリア調査

第1項 対象

対象者は、ロイヤル・バレエ団¹⁵⁾、パリ・オペラ座バレエ団¹⁶⁾、マリインスキー・バレエ¹⁷⁾、オーストラリア・バレエ団¹⁸⁾、香港バレエ団¹⁹⁾、シンガポールバレエ²⁰⁾に所属する現役ダンサー、または過去に所属経験のあるダンサーを対象とした。シンガポールバレエ以外の世界トップクラスのバレエ団に所属した経験を持つ日本人ダンサーにも協力を依頼し、対象を拡大した。

各バレエ団の歴史と特徴を表2に、世界トップクラスのバレエ団に所属した経験を持つ日本人バレエダンサーの経歴を表3に示した。

表2 世界のバレエ団

バレエ団名	概要
ロイヤル・バレエ団 (The Royal Ballet)	1931年にニネット・ド・ヴァロワによって設立され、当初は「ヴィック・ウェルズ・バレエ」として始まった。1946年に「サドラーズ・ウェルズ・バレエ」と改名し、1956年には「ロイヤル・バレエ団」となり、王立の称号を得た。本拠地はロンドンのロイヤル・オペラ・ハウスであり、クラシック作品とコンテンポラリー作品をバランスよく取り入れた、英国を代表するバレエ団として世界的に高い評価を受けている。
パリ・オペラ座バレエ団 (Paris Opera Ballet)	1669年にルイ14世によって設立された世界最古のバレエ団である。最初は「王立音楽アカデミー」の一部として始まり、フランス・バレエの基礎を築いた。本拠地はパリのガルニエ宮およびオペラ・バステューユで、ロイヤル・バレエ団とマリインスキー・バレエにならび、世界3大バレエ団と言われている。
マリインスキー・バレエ (Mariinsky Theatre)	18世紀後半にロシア・サンクトペテルブルクで設立（旧称：キーロフ・バレエ）され、ロシアバレエの伝統を築き上げた代表的なバレエ団である。クラシック作品である『白鳥の湖』や『眠れる森の美女』など、チャイコフスキー作品の初演を行った歴史を持ち、高度な技術と芸術性を持つダンサーが世界中で高い評価を受けている。
オーストラリア・バレエ団 (The Australian Ballet)	1962年に設立され、オーストラリアを代表するバレエ団である。本拠地はメルボルンにあり、クラシック作品から現代作品まで幅広いレパートリーを持っており、地元オーストラリアだけでなく、国際的な舞台でも活躍し、ツアー公演を積極的に展開している。

香港バレエ団 (Hong Kong Ballet)	1979年に設立され、アジアのバレエ界を牽引している。本拠地は香港文化センターで、クラシックバレエからコンテンポラリーダンスまで幅広い作品を上演している。中国と西洋文化の融合を特徴とし、国際的な振付家やダンサーとのコラボレーションも積極的に行っている。
シンガポールバレエ (Singapore Ballet)	1988年にシンガポール・ダンス・シアターとして設立された。シンガポールを代表する国内唯一のバレエ団であり、アジア地域において高い評価を受けているプロフェッショナルなバレエ団である。シンガポールの芸術文化振興の一環として、クラシックバレエからコンテンポラリーダンスまで、幅広いスタイルを取り入れたパフォーマンスを国内外で展開している。

表 3 世界トップクラスのバレエ団に所属した経験を持つ日本人バレエダンサーの経歴

バレエダンサー	経歴
飯島望未	6歳からバレエを始め、2007年15歳で単身渡米後、ヒューストン・バレエ団の研修生として、翌年16歳最年少で入団した。19年3月には、ヒューストン・バレエ団のプリンシパルに昇格した。現在は熊川哲也率いるK Ballet Tokyoのプリンシパルとして活躍している。
根本里菜	3歳からバレエを始め、15歳の時にフランスに単身で留学し、恩師の工藤大貳のもとで2年間バレエを学ぶ。2009年にはローザンヌ国際バレエコンクールに出場し、奨学金を得てロイヤル・バレエ団で1年間の研修を受けた。2011年にオーストラリア・バレエ団に入団し、18年にソリストに昇格した。
石井久美子	8歳からバレエを始め17歳の時にロシアのワガノワ・バレエアカデミーに留学した。卒業後、2006年に日本人初となるマリインスキー・バレエに入団し、現在は石井久美子バレエプロジェクトの代表として後進の育成にも力を注いでいる。

第2項 各バレエ団所属ダンサーの文献調査

各バレエ団の公式ウェブサイトや公開資料を通じて、所属ダンサーの出身校や出身、国際コンクール入賞に関する情報を収集した。所属ダンサーの出身地や出身バレエ学校を整理し、類似性や傾向を分析した。これにより、世界的に主要なバレエ団で活躍するダンサーに共通する特徴を明らかにした。

第3項 シンガポールバレエ所属ダンサーの文献調査とアンケート調査

1) シンガポールバレエ全所属ダンサーの文献調査

シンガポールバレエの公式ウェブサイトや公開資料を基に、所属ダンサーの出身校や出身地に関する情報を収集した¹⁷⁾。

2) 現役・元シンガポールバレエ所属ダンサーへのアンケート調査

シンガポールバレエに所属する現役ダンサー、およびに過去に所属経験のあるダンサー計20人に対し、以下の6項目を含むアンケート調査を実施した。

- バレエを習い始めた年齢
- プロフェッショナルトレーニングを始めた年齢
- 出身校
- 学習したバレエメソッド
- バレエ留学のきっかけ
- シンガポールバレエ入団までのオーディション経緯

アンケート調査から得られたデータを基に、シンガポールバレエ所属ダンサーの経歴やトレーニング背景、入団までのオーディション経緯を整理し、共通点や特徴を分析した。

第4項 世界トップクラスのバレエ団に所属した経験を持つ日本人ダンサーへの

インタビュー調査

世界のトップバレエ団に所属した経験のある日本人ダンサーを対象にし、インタビュー調査を実施した。経歴、留学中の経験、オーディションの過程などを詳細に収集した。

対象者のそれぞれのバレエ団に所属するまでの経緯、成功要因、コンクールやオーディションの役割について分析し、世界で活躍するための要因を特定した。バレエ学校と入団するまでのそれぞれのステージでの成功要因を探るために、幼少期、バレエ学校期、入団について発言内容を分類し、分析を行った。

第3節 世界のコンクールとバレエ団の関係性

対象は、2003年から2024年に世界の主要コンクールであるローザンヌ国際バレエコンクール²¹⁾、YAGP²²⁾に入賞した日本人ダンサーとした。

対象者のスカラシップ獲得状況と、その後のキャリアについて公開情報を用いてデータ収集した。そして、コンクール入賞をきっかけとして、各人のプロキャリアはどのような歩みであったのかについて、分析した。

第4節 指導方法と指導者育成プログラムの文献調査とインタビュー調査

第1項 指導方法

対象は世界的な指導方法として知られている主要なバレエメソッド（ロシア・メソッド²⁰⁾、フランス・メソッド²¹⁾、R.A.D.²¹⁾など）と、日本のバレエ教室でのレッスン内容とした。

主要バレエメソッド、およびバレエ教室がどのようなシラバス内容で構成されているかについて、ウェブや教科書を用いて情報収集した。各バレエメソッドの内容を要約したあとに、それぞれの共通点や特徴について、整理した。整理した結果は、バレエ経験15年以上でバレエ知識のある4人と協議し、内容の妥当性を担保した。さらに、この結果を用いて、日本の幼少期のトレーニングに追加すべき点を抽出した。

第2項 バレエ学校の進級試験や教育プログラム

対象は世界のバレエ学校（例：パリ・オペラ座バレエ学校、ロイヤル・ウィニペグバレエ学校）とし、それぞれの卒業生にインタビュー調査を行った。進級試験の内容や教育プログラムについて、インタビューと公開資料を基に情報を収集した。

収集したデータを比較分析し、進級基準や教育プログラムの優れた点や改善点を明確化した。さらに、日本のバレエ教室の特性を補完する形で、進級試験の導入可能性を検討した。

第3項 指導者育成方法

主要なバレエメソッド（ロシア・メソッド、R.A.D.、チェケッティ・メソッドなど）における指導者育成プログラムを対象とした。

指導者の資格取得に必要な条件（トレーニング期間やカリキュラム）の文献調査を行った²²⁾²³⁾。各プログラムの内容を比較し、日本国内における指導者育成の課題を特定した。さらに、指導者育成のための体系的な資格制度の導入可能性を検討した。

第5節 他競技の育成方法と指導者育成方法

第1項 他競技の育成方法

卓球などの他のスポーツ競技を対象とし、特に育成方法において成功している事例の文献調査を行った²⁴⁾。

他競技の育成プログラムについて、文献調査と専門家のコメントを用いて情報収集を行った。調査では、卓球で採用されている段階的なトレーニング方法や進級システムがバレエ教育にどのように応用可能であるかを検討した。

第2項 他競技の指導者育成方法

サッカーの指導者育成方法²⁵⁾を対象に文献調査を行い、資格取得の条件や教育内容について情報を収集した。

公開資料を基に、JFA コーチライセンスの資格取得条件、教育内容、各ライセンスの対象レベルについて調査を行った。その後、バレエ教育における指導者育成方法との比較分析を実施し、指導者育成における資格制度の有効性や、バレエ教育への応用可能性を特定した。

第6節 倫理的配慮

アンケートおよびにインタビュー調査対象者には、個人情報の保護、公表の方法について説明を行い、同意を得たうえでインタビューを実施する。また、インタビューした内容を論文にする前に対象者の承認を取り、公表の範囲の合意を得ることとする。

第3章 結果

第1節 世界のバレエ団所属ダンサーの出身地と出身校の分析

第1項 ロイヤル・バレエ団

1) ロイヤル・バレエ団所属ダンサーの出身バレエ学校

ロイヤル・バレエ団¹⁵⁾には、2024年12月時点で103人のダンサーが所属していた。所属ダンサー103人中83人が提携校、ロイヤル・バレエ学校の出身であり、バレエ学校とバレエ団のネットワークが存在していた。表4はロイヤル・バレエ団所属ダンサーの出身校、23校である。所属ダンサーは103人であったが、複数校に通ったダンサーが6人いたため、113人分の出身校となっている。表5はロイヤル・バレエ団所属ダンサーの出身であり、ロイヤル・バレエ団が所在するUK出身が48人で約46%を占めていた。さらに、所属ダンサー103人のうち33人がコンクールを経験しており、そのうちの29人がローザンヌ国際バレエコンクールかYAGPのどちらか、または両方で結果を残した経験があった。

表4 ロイヤル・バレエ団所属ダンサーの出身バレエ学校

学校名 (国)	人数 (人)
ロイヤル・バレエ学校 (UK)	83
カナダ・ナショナル・バレエ・スクール (カナダ)	4
エルムハースト・バレエ・スクール (UK)	4
イングリッシュ・ナショナル・バレエ・スクール (UK)	2
ノーザンバレエアカデミー (UK)	2
モザ・バレエスクール (ベルギー)	1
ハモンド・バレエ・スクール (UK)	1
ヒューストン・バレエアカデミー (アメリカ)	1
ジョフリー・バレエ・スクール (アメリカ)	1
チューリッヒ・ダンス・アカデミー (スイス)	1
モナコ王立グレースバレエ学校 (モナコ)	1
スカラ座バレエアカデミー (イタリア)	1
スクール・オブ・アメリカン・バレエ・シアター (アメリカ)	1
ペルミバレエ学校バレエスクール (ロシア)	1
平野節子バレエ教室 (日本)	1
地主薫エコールドバレエ (日本)	1
モスクワステートアカデミー (ロシア)	1

ポリショイ・バレエアカデミー（ロシア）	1
ハンブルグ・バレエ学校（ドイツ）	1
オーストラリア・バレエ学校（オーストラリア）	1
北京ダンス・アカデミー（中国）	1
ヴィクトル・ウラテ・バレエ学校（スペイン）	1
その他	1

表 5 ロイヤル・バレエ団所属ダンサーの出身地

出身	人数（人）
UK	48
日本	11
アメリカ	9
オーストラリア	7
ブラジル	5
イタリア	4
ロシア	3
韓国	4
スペイン	3
アルゼンチン	1
オーストリア	1
中国	1
メキシコ	1
オランダ	1
ノルウェー	1
ポルトガル	1
南アフリカ	1
ザンビア	1

2) ロイヤル・バレエ団に所属する日本人ダンサーのキャリアパス

2024 年 12 月時点でロイヤル・バレエ団には 11 人の日本人ダンサーが所属しており、それぞれの経歴を整理したところ、4 つの異なるパターンが確認された（表 6）。

第一に、国際バレエコンクールを経由し、スカラシップを獲得してロイヤル・バレエ学校に入学し、卒業後にロイヤル・バレエ団へ入団するというルートである。このパターンは 5 人に該当し、彼らの多くはローザンヌ国際バレエコンクールや YAGP などの国際コンクールで高い成績を収め、バレエ学校の奨学金を獲得していた。

第二に、コンクールでの受賞を経て直接ロイヤル・バレエ団に入団するという経路が確認された。このパターンに該当するのは5人であり、うち4人はローザンヌ国際バレエコンクールでプロ研修賞を受賞し、ロイヤル・バレエ学校を経ずにプロフェッショナルとしてのキャリアをスタートさせた例がある。ロイヤル・バレエ団はバレエ学校出身者のみを採用の対象としているわけではなく、優れたコンクール実績を持つダンサーを直接採用するケースも存在していた。

第三に、コンクールを経ずに直接ロイヤル・バレエ学校に入学し、その後バレエ団へと進む経路が確認された。このパターンは1人に該当し、11歳から16歳までが学ぶロイヤル・バレエ学校のロウアー・スクールで英国のバレエ教育を受けていた。

表6 ロイヤル・バレエ団所属日本人ダンサーの出身バレエ教室とバレエ学校

名前	出身バレエ教室	出身バレエ学校
平野亮一	平野節子バレエスクール	-
金子扶生	地主薫エコールドバレエ	-
高田茜	高田弘美バレエスタジオ	ボリショイ・バレエアカデミー
アクリ瑠嘉	アクリ・堀本バレエアカデミー	ロイヤル・バレエ学校
前田紗江	木内真由美バレエスクール	ロイヤル・バレエ学校
佐々木万璃子	川口ゆり子バレエスクール	ロイヤル・バレエ学校
五十嵐大地	新潟バレエスクール	ロイヤル・バレエ学校
桂 千里	不明	ロイヤル・バレエ学校 (ロウアー・スクール)
中尾太輔	愛媛バレエアカデミー	ロイヤル・バレエ学校
佐々木須弥奈	佐々木美智子バレエ	チューリッヒ・ダンス・アカデミー
小林愛里	デパルクバレエスクール	モザ・バレエスクール

第2項 パリ・オペラ座バレエ団

1) 英国パリ・オペラ座バレエ団所属ダンサーの出身バレエ学校

パリ・オペラ座バレエ団¹⁶⁾においても、提携するパリ・オペラ座バレエ学校から多くのダンサーが輩出されており、2024年12月時点の所属ダンサー149人中105人がこのバレエ学校の卒業生であった。表7はパリ・オペラ座バレエ団に所属するダンサーの出身校であるが、2022年以降に所属したダンサー及びに一部のダンサーの出身校がパリ・オペラ座バレエ団の公式ウェブサイトで公開されていないため、出身校不明のダンサーが38人いた。また、ダンサーの出身は公開されていないため、正確な情報は確認できなかった。

表 7 英国パリ・オペラ座バレエ団所属ダンサーの出身バレエ学校

学校名	人数（人）
パリ・オペラ座バレエ学校（フランス）	105
オーストラリア・バレエ学校（オーストラリア）	1
ベルリン国立バレエ学校（ドイツ）	1
ブリスベン・アカデミー・オブ・ダンス（オーストラリア）	1
コロソ劇場芸術学校（アルゼンチン）	1
韓国国立バレエアカデミー（韓国）	1
スカラ座バレエアカデミー（イタリア）	1
不明	38

第 3 項 マリインスキー・バレエ

1) マリインスキー・バレエ所属ダンサーの出身バレエ学校

ロシアのマリインスキー・バレエ¹⁷⁾では、2024 年 12 月時点で所属ダンサー 74 人中 62 人が提携校であるワガノワ・バレエアカデミー出身であった。表 8 はマリインスキー・バレエ所属ダンサーの出身校を示したものである。現在マリインスキー・バレエに所属しているダンサーは 74 人だったが、複数校に通ったダンサーが 1 人いたため、表 8 は 75 人の出身校となっている。また所属ダンサー 74 人のうち 55 人がロシア出身、2 人がウクライナ出身となっていた。（表 9）

表 8 マリインスキー・バレエ所属ダンサーの出身バレエ学校

学校名（国）	人数（人）
ワガノワ・バレエアカデミー（ロシア）	62
ペルミバレエ学校（ロシア）	3
ロイヤル・バレエ学校（UK）	1
バクー・スクール・オブ・ダンス（アゼルバイジャン）	1
韓国国立バレエスクール（韓国）	1
ボリス・エイフマン国立バレエアカデミー（ロシア）	1
オーストリア・バレエスクール（オーストリア）	1
モスクワダンスアカデミー（ロシア）	1
ジョン・クランコ・スクール（ドイツ）	1
パリ・オペラ座バレエ学校（フランス）	1
クラスノヤルスキー・ホレオグラフィチェスキー・コレージュ（ロシア）	1
モナコ王立グレースバレエ学校（モナコ）	1

表 9 マリインスキー・バレエ所属ダンサーの出身地

出身	人数（人）
ロシア	55
ウクライナ	2
カザフスタン	2
モルドバ	2
アメリカ	2
アゼルバイジャン	1
バシコルトスタン共和国	1
ベラルーシ	1
フランス	1
ドイツ	1
ハンガリー	1
日本	1
キルギス	1
韓国	1
トルクメニスタン	1
ウズベキスタン	1

第 4 項 オーストラリア・バレエ団

1) オーストラリア・バレエ団所属ダンサーの出身バレエ学校

2024 年 12 月時点で、オーストラリア・バレエ団¹⁸⁾には、75 人のダンサーが所属していた。そのうち 53 人が提携校であるオーストラリア・バレエ学校出身であった。（表 10）さらに、所属ダンサー 75 人のうち 50 人がオーストラリア出身であり、オーストラリア出身でないものは 25 人であった。（表 11）

表 10 オーストラリア・バレエ団所属ダンサーの出身バレエ学校

学校名	人数（人）
オーストラリア・バレエ学校（オーストラリア）	58
ロイヤル・バレエ学校（UK）	4
ナショナル・シアター・バレエ・スクール（オーストラリア）	2
ワガノワ・バレエアカデミー（ロシア）	2
スクール・オブ・アメリカン・バレエ・シアター（アメリカ）	2
北京ダンス・アカデミー（中国）	2
ヒューストン・バレエアカデミー（アメリカ）	1

ジョン・クランコ・スクール（ドイツ）	1
イングリッシュ・ナショナル・バレエ・スクール（UK）	1
スクール・オブ・アメリカン・バレエ（アメリカ）	1
タニヤ・ピアソンズクラシカルコーチングアカデミー（オーストラリア）	1
キューバ国立バレエスクール（キューバ）	1
カナダ・ナショナル・バレエ・スクール（カナダ）	1
プライベートコーチ	1

表 11 オーストラリア・バレエ団所属ダンサーの出身地

出身	人数（人）
オーストラリア	50
日本	5
中国	4
ニュージーランド	4
アメリカ	2
南アフリカ	3
ブラジル	1
キューバ	1
ドイツ	1
ロシア	1
シンガポール	1
UK	1
ウクライナ	1

2) オーストラリア・バレエ団に所属する日本人ダンサーのキャリアパス

2024 年 12 月時点でオーストラリア・バレエ団には 5 人の日本人ダンサーが所属しており（表 12）、それぞれの経歴を整理したところ、異なる 4 つのパターンが確認された。

第一に、オーディションを経てスカラシップを獲得し、オーストラリア・バレエ学校へ進学したケースが 2 人に見られた。このうち 1 人は国際コンクールでの受賞歴を持つものの、直接コンクールを通じてスカラシップを獲得した情報は確認できなかった。

第二に、国際コンクールでの受賞を経てスカラシップを獲得し、そのままオーストラリア・バレエ学校に入学したケースが 2 人確認された。2 人のどちらも YAGP を経て、スカラシップを受賞していた。

第三に、スカウトを受けてスカラシップを獲得し、海外のバレエ学校に進学した後、コンクールを経て他のバレエ団に所属し、その後オーストラリア・バレエ団へ移籍したケースが 1 人存在した。

表 12 オーストラリア・バレエ団所属日本人ダンサーの出身バレエ教室とバレエ学校

名前	出身バレエ教室	出身バレエ学校
近藤亜香	篠井志保バレエスタジオ	オーストラリア・バレエ学校
根本里菜	不明	工藤大二、ミニク・カルフーニ
山田悠未	桜井クラシックバレエ教室	オーストラリア・バレエ学校
渡邊綾	山本禮子バレエ研究所	オーストラリア・バレエ学校
有村花梨菜	バレエスタジオ 22	オーストラリア・バレエ学校

第 5 項 香港バレエ

1) 香港バレエ団所属ダンサーの出身バレエ学校

香港バレエ団¹⁹⁾では、提携校の香港バレエアカデミーが設立されたのが 2024 年であったため、現在所属しているダンサーの中に提携校の出身者は確認されなかった。表 13 は香港バレエ団所属ダンサーの出身校である。2024 年 12 月時点、香港バレエ所属ダンサーは 52 人確認されたが、そのうちの 16 人が複数校通っていたため、67 人分の出身校が含まれている。ロイヤル・バレエ団所属ダンサー（103 人）の出身校の合計と、マリインスキー・バレエ所属ダンサー（74 人）の出身校の合計がそれぞれ 22 校と 12 校だったのに対して、香港バレエ団（52 人）は 37 校となった。（表 11）所属ダンサー 52 人のうち中国出身のダンサーは 30 人、その中で香港出身者は 11 人であった。（表 14）

表 13 香港バレエ団所属ダンサーの出身バレエ学校

学校名	人数（人）
北京ダンス・アカデミー（中国）	7
香港演藝學院（中国）	7
ロイヤル・バレエ学校（UK）	3
ジョン・クランコ・スクール（ドイツ）	3
瀋陽音楽学院（中国）	3
上海戲劇学院（中国）	2
イングリッシュ・ナショナル・バレエ・スクール（UK）	2
遼寧バレエスクール（中国）	2
ハリッド・コンサバトリー（アメリカ）	2
フィリピン国立芸術高校（フィリピン）	2
ワシントン・スクール・オブ・バレエ（アメリカ）	2
東京バレエ学校（日本）	2

学校名	人数（人）
モナコ王立グレースバレエ学校（モナコ）	1
オランダ国立バレエアカデミー（オランダ）	1
ロイヤル・バレエ学校（UK）	1
カリフォルニアバレエスクール（アメリカ）	1
カナダ・ナショナル・バレエ・スクール（カナダ）	1
ゴー・バレエ・アカデミー（カナダ）	1
中国美術学院（中国）	1
ジョフリー・バレエ・スクール（アメリカ）	1
ヨーロピアン・スクール・オブ・バレエ（オランダ）	1
キーロフ・アカデミー・オブ・バレエ（アメリカ）	1
オスロ国立芸術アカデミー（ノルウェー）	1
デ・ラサール大学（フィリピン）	1
クイーンズランド・バレエ・アカデミー（オーストラリア）	1
上海舞踊学校（中国）	1
サンフランシスコ・バレエスクール（アメリカ）	1
上海シアターカンパニー（中国）	1
瀋陽音楽学院（中国）	1
深セン芸術学校（中国）	1
オーストラリア・バレエ学校（オーストラリア）	1
ロック・スクール（アメリカ）	1
アルバータ・バレエスクール（カナダ）	1
国立リスボンバレエ学校（ポルトガル）	1
ワガノワ・バレエアカデミー（ロシア）	1
浙江芸術職業学院（中国）	1
チューリッヒ・ダンス・アカデミー（スイス）	1
広州美術学院（中国）	1
星海音楽学院（中国）	1
不明	5

表 14 香港バレエ団所属ダンサーの出身

出身	人数（人）
中国	30
日本	7
UK	2
フィリピン	2

出身	人数（人）
アメリカ	2
オーストラリア	1
カナダ	1
韓国	1
ニュージーランド	1
不明	5

第6項 シンガポールバレエ

1) シンガポールバレエ所属ダンサーの出身地

2024年12月時点で、シンガポールバレエ²⁰⁾には38人のダンサーが所属しており、9か国からダンサーが集まっていた。表15は所属ダンサーの出身地を示したものであり、オーストラリア出身11人、日本出身10人、シンガポール出身9人で、この3か国が全体の75%を占めていた。その他の出身地としては、アメリカ、UK、タイ、中国、台湾が含まれていた。

表15 シンガポールバレエ所属ダンサーの出身地

国	人数（人）
オーストラリア	11
日本	10
シンガポール	9
アメリカ	3
UK	2
タイ	1
中国	1
台湾	1

また、現役シンガポールバレエ所属ダンサーの38人の出身校は表16のとおりである。シンガポールバレエの提携校出身者は2人であった。

表16 シンガポールバレエ所属ダンサーの出身バレエ学校

学校名（国）	人数（人）
オーストラリア・バレエ学校（オーストラリア）	4
セントラル・スクール・オブ・バレエ（UK）	4
エルムハースト・バレエ・スクール（UK）	4

学校名（国）	人数（人）
ニュージーランド・スクール・オブ・ダンス（ニュージーランド）	3
ヨーロッパ・スクール・オブ・バレエ（UK）	2
カナダ・ナショナル・バレエ・スクール（カナダ）	2
ウェストオーストラリアンアカデミーオブパフォーミングアーツ （オーストラリア）	2
ナショナル・シアター・バレエ・スクール（オーストラリア）	2
シンガポールバレエ・スカラー（シンガポール）	2
上海舞踊学校（中国）	2
オランダ国立バレエアカデミー（オランダ）	1
タニヤ・ピアソンズクラシカルコーチングアカデミー（オーストラリア）	1
サンフランシスコ・バレエスクール（アメリカ）	1
スクール・オブ・アメリカン・バレエ（アメリカ）	1
ヒューストン・バレエアカデミー（アメリカ）	1
テリーチャールズワースバレエインスティテュート（オーストラリア）	1
チェンマイ・バレエアカデミー（タイ）	1
遼寧バレエスクール（中国）	1
南洋芸術学院（シンガポール）	1
アルバータ・バレエスクール（カナダ）	1
ゴー・バレエ・アカデミー（カナダ）	1
モナコ王立グレースバレエ学校（モナコ）	1
クイーンズランド・バレエ・アカデミー（オーストラリア）	1

第7項 出身校と出身のまとめ

1) 出身校と所属バレエ団

表 17 は、ロイヤル・バレエ団、パリ・オペラ座バレエ団、マリインスキー・バレエ、オーストラリア・バレエ団、香港バレエ団、シンガポールバレエに所属しているダンサーの出身校をまとめたものである。

表 17 世界のバレエ団所属ダンサーの出身校

	ロイヤル・ バレエ団	パリ・オペ ラ座バレエ 団	マリインス キー・バレ エ	オーストラ リア・バレ エ団	香港 バレエ団	シンガポー ルバレエ
所属 ダンサー	103	149	74	75	52	39
提携校	83	105	62	58	0	2
国内の 他学校	10	0	7	3	29	1
ロイヤル・ バレエ学校		0	9	4	3	0
パリ・オペ ラ座バレエ 学校	0		1	0	0	1
ワガノワ・ バレエアカ デミー*	0	0		2	1	0
オーストラ リア・バレ エ学校	0	1	0		1	4
その他 ヨーロッパ	4	2	11	6	8	13
アメリカ	3	0	0	2	9	2
カナダ	4	0	0	1	3	4
その他	5	4	2	2	8	12

*ワガノワ・バレエアカデミー＝マリインスキー・バレエの提携校

2) 所属バレエ団と出身

表 18 はロイヤル・バレエ団、マリインスキー・バレエ、オーストラリア・バレエ団、香港バレエ団、シンガポールバレエに所属しているダンサーの出身地をまとめたものである。パリ・オペラ座バレエ団の公式ウェブサイトでは各ダンサーの出身地は確認されなかった。

表 18 世界のバレエ団所属ダンサーの出身地

	ロイヤル・ バレエ団	マリインスキ ー・バレエ	オーストラリ ア・バレエ団	香港バレエ団	シンガポール バレエ
バレエ団 所在国	48	55	50	30	9
UK		0	1	2	2
フランス	0	1	0	0	1
ロシア	3		1	1	0
オーストラリ ア	7	0		1	11
中国	1	0	4		1
シンガポール	0	0	1	0	
アメリカ	9	2	2	2	3
カナダ	0	0	0	1	0
日本	11	1	5	7	10
その他	27	15	11	4	2

3) 要約

世界3大バレエ団と言われているロイヤル・バレエ団、パリ・オペラ座バレエ団、マリinsky・バレエに所属しているダンサーは、それぞれ80%、70%、83%以上が提携校出身であった。また、オーストラリア・バレエにおいても77%の所属ダンサーが提携校出身であった。中小規模のバレエ団に比べて、大規模なバレエ団では提携校出身者が占める割合が高かった。

さらに、出身に関しては、バレエ団が所在する国の出身者が大多数を占める傾向が見られた。例えば、ロイヤル・バレエ団ではUK出身のダンサーが46%、マリinsky・バレエではロシア出身のダンサーが74%、オーストラリア・バレエ団ではオーストラリア出身のダンサーが67%、香港バレエ団では中国出身のダンサーが58%を占めていた。一方でシンガポールバレエにおいては日本出身のダンサーが最も多い結果となった。また、ロイヤル・バレエ団、オーストラリア・バレエ団、香港バレエ団ではバレエ団所在国出身に次いで日本出身のダンサーが多く在籍していた。

第2節 シンガポールバレエ所属ダンサーのアンケート調査結果

第1項 バレエの開始年齢と留学した年齢

更に現役及びに元シンガポールバレエ所属ダンサーへのアンケート調査を詳しく行った。アンケート回答者は、2024年12月時点での、現役ダンサー13人、元ダンサー4人の、計17人であった。彼らは平均5.2歳でバレエを始め、地元のバレエ教室で基礎的な技術を習得していた。また、バレエ留学をした年齢は10歳から18歳の間で平均は14.5歳であった。

第2項 幼少期のバレエメソッド

17人中8人は幼少期にR.A.D. (Royal Academy of Dance) のバレエメソッドで学習していた。その他はロシア、フランス、イタリア、イギリスの異なるバレエメソッドで教育を受けていた。図1は幼少期に学習したバレエメソッドとバレエ学校で学習したバレエメソッドバレエ学校の比較である。バレエ学校に入学してからは17人中11人が幼少期と異なるバレエメソッドで学習していた。

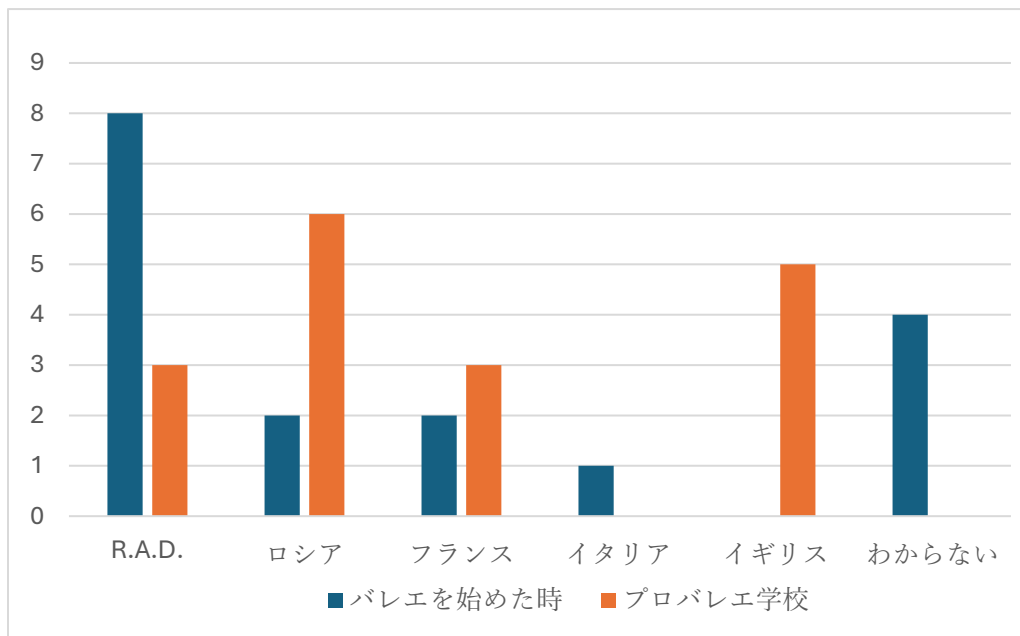


図 1 幼少期とバレエ学校時のバレエメソッド

第 3 項 バレエ学校の入学経緯と在学中の課題

シンガポールバレエに所属するダンサーのバレエ学校入学経緯には複数のルートが存在することが明らかとなった。バレエ学校への入学手段としては、オーディションによる選抜、コンクールを通じたスカラシップの獲得、教師の推薦といった方法が確認された。オーディションを経てバレエ学校に入学したダンサーは 10 人で最も多く、全体の過半数を占めていた。一方、コンクールでの成績によりスカラシップを獲得し、バレエ学校に入学した者は 6 人、教師の推薦を受けて進学した者は 1 人であった。

バレエ学校入学の理由については、「プロフェッショナルダンサーになるための環境を求めた」「教師の勧めがあった」「地元ではプロになるための十分な教育を受けられないと感じた」などの回答が多く見られた。また、一部のダンサーは「バレエ学校の存在を十分に知らなかったが、コンクールや教師の推薦を通じて入学を決めた」と回答した。

バレエ学校在学中の課題については、言語の壁、競争の厳しさ、経済的負担、身体的な適応の難しさなどが挙げられた。特に、母国以外のバレエ学校に進学したダンサーは、授業が英語やフランス語で行われる場合が多く、入学当初は言語の習得に苦戦したと報告している。多くのダンサーは、最初の 1～2 年間は言語の壁を克服しながら、バレエ技術の向上を求められる環境にあった。また、競争の激しい環境の中で常に高いパフォーマンスを求められ、心理的なプレッシャーを感じることも多かったことが明らかとなった。

第4項 シンガポールバレエの入団経緯

シンガポールバレエへの入団経緯には大きく3つの方法が確認された。第一に、ビデオオーディションや現地オーディションを通じた入団であり、これは最も一般的な方法であり、12人が該当した。第二に、シンガポールバレエの関係者や教師からの推薦による入団であり、主にシンガポール出身の3人のダンサーがこの経路を通じて入団していた。第三に、シンガポールバレエの提携校からの入団であり、2人がこのルートを経ていた。

シンガポールバレエを選択した理由については、「国際的な環境で経験を積める」「他のバレエ団と比べて外国人ダンサーの採用機会が多い」「様々な振付家の作品を踊ることができる」などの回答が得られた。また、「シンガポールという地理的条件や生活環境が自身のライフスタイルに合っている」といった理由を挙げたダンサーも複数存在した。さらに、「若いうちから主要な役を務める機会が得られると考えた」という理由を挙げたダンサーもあり、大規模なバレエ団と比べてキャリアの早い段階で活躍できる可能性が高いことが魅力の一つとされていた。

また、一部のダンサーは、シンガポールバレエ入団前に他のバレエ団に所属していた経験があり、キャリアの途中で移籍してきたことが確認された。移籍の理由としては、「より多様なレパートリーを経験できる環境を求めた」「契約の終了に伴い新たなバレエ団を探していた」などが挙げられた。さらに、一部のダンサーは、他のバレエ団での経験を経た上で、シンガポールバレエの環境をより魅力的と判断し移籍を決断したと述べている。

第3節 世界のバレエ団に所属する日本人ダンサーの経歴調査結果

第1項 バレエの開始年齢と留学した年齢

現在及び以前、世界のバレエ団に所属していた経験のある日本人バレエダンサーへのアンケート調査を、計14人に行った。調査対象者のバレエ開始年齢は平均4.5歳であり、いずれも幼少期から日本国内の地元のバレエ教室で基礎的な訓練を受けていた。留学を開始した年齢は12歳から17歳まで幅広く、平均年齢は15.3歳であった。多くのダンサーが中学卒業前後の時期に海外バレエ学校への進学を決定していた。

第2項 バレエ学校進学の原因と入学経緯

調査対象のダンサーがバレエ学校へ進学した理由として、最も多く挙げられたのは「プロフェッショナルダンサーになるための環境を求めた」というものであった。日本のバレエ教室ではプロとしてのキャリア形成に必要な教育を十分に受けられないと感じたダンサーが多く、より高度な指導を求めて海外のバレエ学校に進学していた。また、「バレエの本場で学びたい」「世界の舞台で通用する技術を身につけたい」という意識を持つダンサーもいた。さらに、一部のダンサーは「教師の勧めやコンクールの結果により進学を決めた」と回答しており、外部からの影響を受けて進路を決定した例も確認された。

バレエ学校への進学経路としては、オーディションによる入学、コンクールを通じたスカラシップの獲得、スカウトなどの方法が確認された。オーディションを経てバレエ学校に入

学したダンサーは7人であった。コンクールでの受賞を通じてスカラシップを獲得し、バレエ学校に進学したダンサーは6人であり、特にYAGPなどの国際バレエコンクールなどが進学のかっけとなっていた。スカウトを通じてバレエ学校に進学したケースは1人であった。

第3項 バレエ学校在学中の課題

バレエ学校に進学したダンサーの多くは、英語、フランス語、イタリア語といった言語で授業を受けることとなり、入学当初はコミュニケーションに苦労していたと回答した人が多数いた。特に、アカデミックな授業においては、教師の指示を理解するのに時間を要し、授業内容についてクラスメイトに確認しながら進めていたと答えた者が多かった。また、イギリスのバレエ学校では、イギリス英語のアクセントに適応する必要があり、語学の問題が日常生活にも影響を及ぼしていたとする報告もあった。さらに、文化的な違いに適応する必要もあり、寮生活のルール、食習慣、社交のスタイルなど、日本とは異なる環境に戸惑いを感じるがあったという意見があがった。ホームシックを経験したダンサーも多く、特に留学初期には家族や友人と離れて暮らすことに強い孤独感を抱えていたと述べた者もいた。

バレエ学校での生活は、午前中からバレエクラスが始まり、その後アカデミックな授業に参加し、夜にはさらにバレエのリハーサルや自主練習を行うという過密なスケジュールであったと答えた者が目立った。学業とバレエの両立が求められるため、体力的な負担が大きく、十分な休息を取ることが難しい状況が続いたとする報告が複数寄せられた。特に、学業の成績維持とバレエの技術向上を同時に求められる環境では、精神的にも大きなプレッシャーを感じていたとする意見が一定数あった。

バレエ学校における体型管理は、ダンサーにとって大きな課題であり、食文化の違いによる影響が大きかったと回答した者が多かった。日本での食生活とは異なり、現地の食事に適応するのが難しく、体型維持に苦労していたと答えた者もいた。中には、指導者から体重管理について厳しく指摘され、極端な食事制限を行わざるを得ない状況に陥ったとする報告もあった。特に、体型維持が重視されるバレエの世界では、「太ってはいけない」という強いプレッシャーを感じていたと答えたダンサーも複数人確認された。また、外国人のダンサーと比較して骨格や筋肉のつき方が異なるため、日本人ダンサーがバレエ技術の習得において不利に感じる場面があったとする意見も散見された。

世界中から集まる優秀な生徒と競争しなければならず、技術的なレベルの高さに圧倒されるダンサーが多かったとする報告があった。他の生徒の優れた技術に対する驚きと同時に、自身との実力差を痛感し、精神的に落ち込むこともあったと答えた者が少なくなかった。特に、体型やルックスに恵まれた生徒が有利に評価されることを実感し、自信を喪失することがあったという声も複数あがった。また、バレエ学校最終学年になると、プロとしてのキャリアを確立するためのオーディションが始まり、多くのダンサーが将来の不確実性に対する強い不安を抱えていたと述べた者がいた。特に、最終学年で編入したダンサーは、バレエ団の契約獲得までの準備期間が短く、精神的に追い詰められる状況に直面することがあったとする報告も見受けられた。

第4節 ローザンヌ国際バレエコンクールと YAGP の特徴

第1項 ローザンヌ国際バレエコンクールと YAGP の特徴

表 19 は世界の主要な 10 代ジュニアダンサーのためのコンクール、ローザンヌ国際バレエコンクール²¹⁾と YAGP²²⁾についてまとめたものである。どちらのコンクールもすでにプロとして活動実績があるダンサー、または、バレエ団に入団が決まっているダンサーでないことが応募条件となっていた。

ローザンヌ国際バレエコンクールでは、毎年第 1・2 次審査として書類やビデオ審査が行われ、合格した最大 80 人のダンサーが現地で執り行われる第 3 次審査に参加する資格が与えられていた。このうち最大 20 人が決戦に残り、賞やスカラシップの対象となっていた。

YAGP は、アメリカおよび世界中で毎年地域予選を実施しており、全世界で約 1 万人の参加者がいるとされている。そこから各地域の予選を勝ち残った約 1200 人がニューヨークで毎年 4 月に行われる決戦に進出し、賞やスカラシップの対象となっていた。YAGP はコンクールで順位をつける目的だけでなく、コンクール期間中に、プロ志望のジュニアダンサーに対して世界有数のバレエ団やバレエ学校の芸術監督や教員によるワークショップも提供していた。また、地域予選の参加者に対してもより多くの機会を与えることを目的とし、2012 年から地域予選の段階でも優れた参加者にはスカラシップが授与されるようになっていた。

表 19 世界の主要コンクール

コンクール	対象	開催地	賞	特徴
ローザンヌ 国際バレエ コンクール	15～18 歳まで のダンサー	スイス・ロー ザンヌ	・スカラシップ賞 ・プロ研修賞 ・コンテンポラリー賞 ・ベスト・ヤング・タ レント賞 ・ベスト・スイス賞 ・観客賞 ・WEB 視聴者賞	・1973 年設立 世界中の才能を 発見・促進・サ ポート ・プロになるポ テンシャルを評 価
YAGP (Youth America Grand Prix)	プレ・コンペ ティティヴ： 9～11 歳 ジュニア： 12～14 歳 シニア： 15～20 歳	予選：アメリカ の 25 都市と 8 ～9 の国際拠 点 決選：アメリ カ・ニューヨ ーク	・グランプリ ・ホープアワード ・審査員からのスペシ ヤルメンション ・ゴールド、シルバ ー、ブロンズメダル	ダンスのグロー バルネットワー クとして機能 し、ジュニアダ ンサーの支援・ 育成すること

第2項 ローザンヌ国際バレエコンクールの入賞者

ローザンヌ国際バレエコンクールは1973年から開催されていたが、2003年以降順位が発表されるようになってからの日本人受賞者を表20にまとめた。

2003年から2024年までの受賞者の33人中31人はローザンヌ国際バレエコンクールで受賞後、プロのバレエ団に所属していた。残りの2人は2023年と2024年のスカラシップ賞受賞者であり、生徒として海外のバレエ学校に在籍していた²¹⁾。

表20 ローザンヌ国際バレエコンクール受賞者（2003～2024年）

年	名前	順位	賞	所属（現在/過去*）
2003	福田圭吾	3位	プロ研修賞	新国立劇場バレエ団*
2004	賛田萌	2位	スカラシップ賞	スウェーデン王立バレエ団*
2004	井澤諒	4位	スカラシップ賞	新国立劇場バレエ団*
2004	松井学郎	6位	プロ研修賞	西オーストラリア・バレエ団
2006	森志乃	5位	スカラシップ賞	アルバータ・バレエ団*
2007	河野舞衣	2位	スカラシップ賞 観客賞	グラン・バレエ団
2008	高田茜	5位	プロ研修賞	ロイヤル・バレエ
2009	水谷実喜	4位	スカラシップ賞	バーミンガム・ロイヤル・バレエ団
2009	根本里菜	6位	プロ研修賞	オーストラリア・バレエ団
2009	高田樹	7位（繰り上がり）	プロ研修賞	ヘッセン州立バレエ団
2010	佐々木万璃子	3位	スカラシップ賞	英国ロイヤル・バレエ団
2011	加藤静流	5位	スカラシップ賞	沿海州マリンスキー・バレエ
2011	堀沢悠子	7位	スカラシップ賞	スターダンサーズ・バレエ団*
2012	菅井円加	1位	プロ研修賞 コンテンポラリー賞	ハンブルク・バレエ団
2013	山本雅也	3位	プロ研修賞	K BALLET TOKYO

年	名前	順位	賞	所属（現在/過去*）
2013	柳澤郁帆	5 位（繰り上がり）	スカラシップ賞	スウェーデン王立バレエ団
2014	二山治雄	1 位	スカラシップ賞	パリ・オペラ座バレエ団*
2014	前田紗江	2 位	スカラシップ賞	ロイヤル・バレエ団
2014	加藤三希央	6 位	プロ研修賞	リヨン・オペラ座バレエ団
2015	伊藤充	3 位	プロ研修賞	ガーサ・バルガ舞踊団
2015	金原里奈	5 位	プロ研修賞	イングリッシュ・ナショナル・バレエ団*
2016	中村淳之介	6 位	スカラシップ賞	ウィーン国立バレエ団
2016	金世友	5 位（繰り上がり）	プロ研修賞	オルデンブルク州立劇場バレエ団
2017	中尾太亮	3 位	スカラシップ賞	英国ロイヤル・バレエ団
2017	山元耕陽	4 位	スカラシップ賞	オランダ国立バレエ団
2019	佐々木須弥奈	3 位	プロ研修賞 ベスト・スイス賞	英国ロイヤル・バレエ団
2019	脇塚優	4 位	スカラシップ賞	ノーザン・バレエ団
2019	住山美桜	8 位	プロ研修賞	カールスルーエ・バーデン州立劇場バレエ団
2021	淵山隼平	5 位	プロ研修賞	イングリッシュ・ナショナル・バレエ団
2022	田中月乃	2 位	プロ研修賞 ベスト・スイス賞	ノルウェー国立バレエ団
2023	宮崎圭介	8 位	スカラシップ賞	ジョン・クランコ・スクール
2024	小林愛里	5 位	プロ研修賞	英国ロイヤル・バレエ団
2024	利田太一	9 位	スカラシップ賞	ハンブルク・バレエ学校

第 3 項 YAGP 入賞者

YAGP は 2000 年から開催されていたが、TOP12 が発表されるようになった 2003 年以降のシニア・ジュニア・プレコンペティティヴの 3 つのディビジョンから、グランプリ受賞者、

ホープアワード、審査員からのスペシャルメンション、ゴールド・シルバー・ブロンズメダル（1位から3位）の受賞者をまとめた²²⁾。2003年から2024年までの決戦での受賞者102人中63人が短期スカラシップ、長期スカラシップ、またはプロ契約をもらっていた。2020年に関してはCOVID-19の影響によりコンクール自体が行われず、オンライン上でのオーディションという形式だった。そのため順位がつかず、スカラシップを受賞した者をまとめ、表21に含めた。

表 21 YAGP 入賞者（2003～2024 年）

年	名前	順位	スカラシップの有無	出身校
2003	坂地亜美(18)	3 位シニア	-	ソウダバレエスクール
	中村志歩(13)	3 位ジュニア	-	畠中三枝バレエ教室
	坂本さくら(11)	Special Mention	スクール・オブ・アメリカン・バレエ・シアター（短期）	田中千賀子バレエスタジオ
	石井杏奈(11)	1 位プレ	-	原のり子バレエスクール
	加藤千恵(11)	3 位プレ	-	田中千賀子バレエスタジオ
	清水猛(17)	3 位シニア	ロック・スクール	白鳥バレエ学園
2004	藤本佳那子(14)	1 位ジュニア	ジョン・クランコ・スクール	ソウダバレエスクール
	堀内恵(11)	1 位プレ	-	金田こうのバレエスクール
2005	唐沢秀子(16)	1 位シニア	サンフランシスコ・バレエスクール	朋友バレエ
	松根花子(14)	グランプリジュニア	パリ・オペラ座バレエ学校	ソウダバレエスクール
	堀内恵(12)	2 位ジュニア	オーストラリア・バレエ学校	金田こうのバレエスクール
	飯島望未(13)	3 位ジュニア	-	ソウダバレエスクール

年	名前	順位	スカラシップの有無	出身校
2006	森本亮介(10)	1位プレ	ロック・スクール、オーストラリア・バレエ学校（短期）	田中バレエ・アート
	土屋文乃(18)	1位シニア	ワシントンバレエ研修生	市川せつこバレエ
	宮崎たま子(16)	2位シニア	スカラ座バレエアカデミー、ワシントン・スクール・オブ・バレエ	金田こうのバレエスクール
	堀内恵(13)	2位ジュニア	ヒューストン・バレエアカデミー（短期）	金田こうのバレエスクール
	加瀬栞(14)	3位ジュニア	ロイヤル・バレエ学校	加藤ひろせバレエ教室
	木ノ内周(13)	2位ジュニア	スクール・オブ・アメリカン・バレエ・シアター（短期）	マユミキノウチバレエスタジオ
2007	森本亮介(11)	1位プレ	スクール・オブ・アメリカン・バレエ・シアター（短期）	田中バレエ・アート
	長崎真湖(18)	1位シニア	-	Ballet Angie, Mongolia
	望月理沙(15)	2位シニア	-	岸辺バレエスタジオ
	浅田良和(18)	2位シニア	-	小柴葉朕バレエスクール
	田辺淳(18)	3位シニア	-	ロック・スクール
	堀内恵(14)	1位ジュニア	-	金田こうのバレエスクール
	寺田智羽(12)	1位ジュニア	-	田中バレエ・アート
2008	奥野凜(15)	2位シニア	ハンブルグ・バレエ学校	村瀬沢子バレエスクール

年	名前	順位	スカラシップの有無	出身校
2009	Saori Otsudo(12)	3 位ジュニア	オーストラリア・バレエ学校 (短期)、キー ロフアカデミー	Soki Ballet International
	山田翔(13)	3 位ジュニア	スクール・オブ・アメリカ ン・バレエ・シアター (短期), カナダ・ ナショナル・バレエ・スクール	小柴葉朕バレエスクール
	柴平くるみ(11)	2 位プレ	オーストラリア・バレエ学校 (短期)	饗場絵美バレエスタジオ
	奥藺将文(不明)	1 位プレ	オーストラリア・バレエ学校 (短期)	深浦バレエスタジオ
	刈谷円香(15)	2 位シニア	スカラ座バレエアカデミー, ロ ック・スクール	Maison du Ballet Etoile
	池田理沙子(15)	3 位シニア	ロック・スクール (短期)	バレエスタジオ DUO
	柴平くるみ(12)	2 位ジュニア	オーストラリア・バレエ学校	饗場絵美バレエスタジオ
	直塚美穂(13)	3 位ジュニア	ロック・スクール (短期)	塚本洋子テアトル・ド・バレエカンパニー
	玉川貴博(14)	3 位ジュニア	ジョン・クラン コ・スクール、 ワシントン・スクール・オブ・ バレエ (短期)	エトワールバレエスクール
	オニール八菜(16)	1 位シニア	-	オーストラリア・バレエ学校

年	名前	順位	スカラシップの有無	出身校
	宮川新大(17)	3 位シニア	ドレスデンバレエカンパニー、 ダンチェンコ劇場バレエ団	坪田バレエスクール
	小川華歩(14)	2 位ジュニア	スクール・オブ・アメリカン・バレエ・シアター、オーストラリア・バレエ学校	バレエ・アカデミーRELEVE
	出野佑都(14)	2 位ジュニア	カナダ・ナショナル・バレエ・スクール、モナコ王立グレースバレエ学校	畠中三枝バレエ教室
	坂本莉穂(11)	1 位プレ	-	キーロフ・バレエアカデミー (Washington, DC)
	内田真弥(11)	2 位プレ	オーストラリア・バレエ学校	杉原和子バレエ・アート
	森川礼央(11)	3 位プレ	スクール・オブ・アメリカン・バレエ・シアター (短期)	田川洋子バレエアカデミー
2011	田代梢(15)	1 位シニア	記載なし	田中千賀子バレエスタジオ
	福土宙夢(15)	2 位シニア	記載なし	バレエスタジオ Duo
	左右木茉琳(11)	2 位ジュニア	記載なし	Soki Ballet International
2012	井澤駿(19)		記載なし	バレエスタジオ Duo
	五十嵐大地(9)	2 位プレ	記載なし	新潟バレエスクール
	戸田昂希(11)	3 位プレ	記載なし	厘奈クラシックバレエカンパニー
2013	永久メイ(12)	1 位ジュニア	記載なし	深田真紗子バレエアカデミー
	野中悠聖(13)	2 位ジュニア	記載なし	mika バレエスタジオ

年	名前	順位	スカラシップの有無	出身校
	五十嵐大地(10)	ホープアワード	記載なし	新潟バレエスクール
2014	二山治雄(17)	1位シニア	-	白鳥バレエ学園
	杉浦優妃(14)	2位ジュニア	ロイヤル・バレエ学校	蔵本誠子バレエスクール
	安江華(10)	3位プレ	オーストラリア・バレエ学校(短期)	饗場絵美バレエスタジオ
2015	栗原ゆう(16)	1位シニア	-	渡辺郁子バレエスタジオ
	速水渉悟(18)	1位シニア	ヒューストン・バレエ	ジョン・クランコ・スクール
	山田ことみ(12)	2位ジュニア	-	ヤマダチエサニーバレエスクール
2016	増田慈(11)	1位プレ	-	K.Classic Ballet Studio
	清田元海	3位シニア	ジョン・クランコ・スクール	稲尾光子バレエスクール
	柴田英里	2位ジュニア	ロイヤル・バレエ学校	金田こうのバレエスクール
	山田ことみ	3位ジュニア	モナコ王立グレースバレエ学校	ヤマダチエサニーバレエスクール
	増田慈	1位ジュニア	モナコ王立グレースバレエ学校	K.Classic Ballet Studio
2017	倉智太朗	1位シニア	-	エリソンバレエ
	三宅琢未	1位ジュニア	-	近藤バレエ研究所
2018	松浦裕磨(15)	1位シニア	ロイヤル・バレエ学校(短期)	エンドウ・バレエ
	中島耀(13)	2位ジュニア	モナコ王立グレース(短期)、ロイヤル・バレエ学校	シンフォニーバレエスタジオ
	末次正樹(14)	2位ジュニア	ヒューストン・バレエアカデミー(短期)、ジ	アリストバレエスタジオ

年	名前	順位	スカラシップの有無	出身校
			ョン・克蘭 コ・スクール	
	梨木玲斗(11)	ホープア ワード	ジョン・克蘭 コ・スクール	梨木バレエスタジオ
2019	佐藤可惟(11)	2 位プレ	記載なし	Y Ballet Academy
2020	田川渚	-	スクール・オ ブ・アメリカ ン・バレエ・シ アター（短期）	本多恵子バレエ学園
	高原ひなた	-	アルバータ・バ レエスクール （短期）	田中千賀子バレエスタジオ
	川船隼	-	バーゼル劇場バ レエ学校	金田こうのバレエスクール
	島田菜乃華	-	バーゼル劇場バ レエ学校	金田こうのバレエスクール
	高田幸弥	-	バーゼル劇場バ レエ学校	バレエスタジオ Duo
	山口虎之介	-	バーゼル劇場バ レエ学校	アリストバレエスタジオ
	荒木美優	-	バーゼル劇場バ レエ学校（短 期）	シンフォニーバレエスタジオ
	田北つぐみ	-	-	須貝りさクラシックバレエスタジオ
	青木萌奈美	-	ヨーロッパ・ スクール・オ ブ・バレエ（短 期）	梨木バレエスタジオ
	亀田智世	-	ヨーロッパ・ スクール・オ ブ・バレエ（短 期）	YARITA YU BALLET STUDIO

年	名前	順位	スカラシップの有無	出身校
	佐合あこ	-	ヨーロピアン・スクール・オブ・バレエ（短期）	レスポワールバレエアカデミー
	戸原和玖	-	ジョン・クランコ・スクール（短期）	K-GRACE BALLET
	佐藤友香	-	カンヌ・ロゼラ・ハイタワー・バレエ学校	Ballet KK International
	国立桃菜フローラ	-	カンヌ・ロゼラ・ハイタワー・バレエ学校（短期）	バレエルクール
	野波瑠璃	-	ロイヤル・バレエ学校	真忠久美子バレエスタジオ
	小田那奈	-	サンフランシスコ・バレエスクール	真忠久美子バレエスタジオ
	迫田穂乃加	-	チューリッヒ・ダンス・アカデミー	ルシアバレエスクール
	笠井優迦	-	チューリッヒ・ダンス・アカデミー（短期）	バレエルクール
	大竹悠佑	-	チューリッヒ・ダンス・アカデミー（短期）	横倉明子バレエ教室
2022	中島尚(14)	1位ジュニア	-	シンフォニーバレエスタジオ
	渡部出日寿(14)	1位ジュニア	-	渡部ブーベルバレエアカデミー
	原明日香(10)	ホープワード	-	バレエルクール

年	名前	順位	スカラシップの有無	出身校
2023	山田優七(10)	プレ 1 位	-	小林絹恵バレエスタジオ
	大久保柚希(13)	2 位ジュニア	ロイヤル・バレエ学校	バレリーナスクール
	高橋杏(10)	2 位プレ	スカラ座バレエアカデミー（短期）、アルバータ・バレエスクール（短期）、ベルリン国立バレエ学校	Flora Ballet
	三苦心嗣(11)	1 位プレ	エルムハースト・バレエ・スクール（短期）、ロイヤル・バレエ学校	渡部ブーベルバレエアカデミー
2024	秋田瑛汰(14)	3 位ジュニア	オランダ国立バレエアカデミー（短期）、ヒューストン・バレエアカデミー（短期）、K-Ballet Academy（短期）	ワクイバレエスクール
	山田優七(11)	1 位プレ	モナコ王立グレースバレエ学校	小林絹恵バレエスタジオ
	高橋杏(11)	3 位プレ	アルバータ・バレエスクール（短期）、K-Ballet Academy、モザ・バレエスクール（短期）、パリ・オペラ座	Flora Ballet

年	名前	順位	スカラシップの有無	出身校
	寺西悠人(10)	3 位プレ	バレエ学校（短期） カンヌ・ロゼ ラ・ハイタワ ー・バレエ学校 （短期）	森高子バレエ教室

第4項 コンクール入賞者とバレエ団入団の関係

ローザンヌ国際バレエコンクールでは、2003 年以降の受賞者 33 人中 31 人がスカラシップ賞やプロ研修賞を受賞経験後、プロのバレエ団に所属していた。一方、YAGP では受賞者の 102 人中 63 人がバレエ学校の短期または長期のスカラシップを受賞していた。両コンクールは、ダンサーの技術的・芸術的スキルを評価するだけでなく、バレエ団やバレエ学校とのネットワーク構築を重要視しており、プロのバレエ団への入団率を高めていた。

また、前節で記した通り、ロイヤル・バレエ団所属ダンサー103 人のうち 29 人がローザンヌ国際バレエコンクールか YAGP のどちらか、または両方で結果を残した経験があり、4 人は他の主要なバレエコンクール出場で優秀な成績を収めていた。

第5節 世界トップクラスのバレエ団に所属した経験を持つ日本人バレエダンサーのインタビュー調査

第1項 飯島望未（元ヒューストン・バレエ、現 K Ballet Tokyo）

1) 幼少期にバレエを始めたきっかけ

「バレエ始めたのは 6 歳で、すごく姿勢が悪かったので母が姿勢矯正の為に体験レッスンに連れて行って私が周りの子達よりも出来ない事が悔しくてのめり込んだって感じです。」

2) 留学を目指したきっかけ

「留学したきっかけは YAGP のニューヨークファイナルで 3 位をもらってスカラシップをもらってって感じで、通っていた大阪のソウダバレエスクールは留学している先輩がたくさんいたから当時は留学するのが普通みたいな感じだったので、自然と海外に行く意識はありました。」

3) 留学の経緯

「YAGP のニューヨークファイナルで3位をもらってスカラシップをもらって、サマープログラムに参加してから、ジュニアカンパニーから入ったの。私はアカデミーじゃなかったからアカデミーのメソッドについてはよくわかってないかも。」

4) 留学中

「留学中は身体的に言えばやっぱりスタイルだったり骨格の違いはとてもコンプレックスになって落ち込んだ時もあったけど、自分の個性を伸ばそうと頑張っていました。とにかく留学中はがむしゃらに一生懸命だったからあまり苦労は感じなかったかな。」

第2項 根本里菜（オーストラリア・バレエ団）

1) 幼少期にバレエを始めたきっかけ

「バレエを始めたのは3歳の頃で、音楽があるとずっと踊ってて、踊るのが好きだから、母がバレエ教室に連れて行って見たら、私がバレエやりたいって言ったのがきっかけみたい！」

2) 留学を目指したきっかけ

「留学しようと思ったのは、一つ目に、バレエをフルタイムで勉強したかったから。後日本ではなかなか金銭的に自立するのが難しいのかもしれないと思った時に将来海外のバレエ団で踊りたいから、早めに海外に出られる機会があれば出たいと思ってたんだ。」

3) 留学の経緯

「留学は、私のフランスの先生が日本で行ってたワークショップでスカラシップをもらったんだ。2年間。」

4) 留学中

「留学前はフランス語、語学が心配ではあったな！でも若かったから怖いもの知らずだったかも！留学中はただもうひたすらで、心配なこととかはなかったな！バレエだけを考えられる環境が幸せだった！」

「私はフランスにいる時は幸せな環境だったけど、バレエと沢山向き合って、バレエで苦労したかな。毎日バレエのこと沢山考えて、どうしたら、どこまで成長すればプロのダンサーになれるのか分からなかったから、そういう面では不安だった。私普通のサラリーマンの家族だから、バレエで沢山お金かけてもらって家族にも大変な思いさせちゃってたから、どうにかしてプロにならなくちゃって必死だったかな！」

第3項 石井久美子（マリインスキー・バレエ）

1) 幼少期にバレエを始めたきっかけ

「8歳の時に小学校が一緒だった子のお母さんにバレエと一緒に试试看？って言われて、行くって言ったのがきっかけ。地元の家から徒歩3分のお教室で、その子も地元が一緒だったから、一緒に通える距離だった。たまたまだったけど当時すごい生徒さんの人数も多いちゃんとしたお教室だったかな。」

2) 留学を目指したきっかけ

「小学校4年生の時にロシア・メソッドに出会って、本当にワガノワの1年生がやっているようなことを、細々とフロアレッスンからストレッチまですごい良い教育を受けていたかな。小学校の頃にロシアバレエに触れることがまずあって、そのあとお教室を転々として、ワガノワで教師資格を取った先生から『海外に行ったらちゃんと良い先生に習った方が良い』って言うてくれた。」

3) 留学の経緯

「お教室などを転々とする中で出会ったロシア人の先生がきっかけでワガノワのオーディションを受けることになるんだけど、オーディションを受けるって言うたら、当時栃木で毎年開催されてたワガノワの公式のオーディションと一緒に着いてきてくれて、『この子は素質がある子だ』みたいに言うてくれて、それで受かったっていうのが留学までの経緯。いろんな繋がりですべてロシアに行くことになって、17歳の誕生日の日にロシアに行った。」

4) 留学中

「ワガノワは当時9年制で、私は8年生に入ってそこで2年間やっていたんだけど、日本にいたときは正直自分がスタイル良いと思ってた。けど、ロシアに行って打ちのめされた感じ。私のクラスの平均身長が174センチとかで177センチの子とかもいたし、自分が小学生に見えるみたい。だからそこで一回打ちのめされて。あと、脚の上がり方一個違うとか、ポジションの入り方一個違うとか、ラインが違うとか、そういう基礎的なことにも打ちのめされた。泣きながら家族に「私の来る場所じゃない」って国際電話かけてたかな。でも一回泣いて聞いてもらってかなりストレス発散されて、逆にそうすればやっていけるなって学んだかな。あとは言語に関しては、バレエで言われてることはわかる。だけど、ちょっと外に出るとわからなかった。なぜかっていうと、留学生の寮があって、ロシア人の寮とも別だったからバレエ団はいるまでは全然だったかな。それによってホームシックとかにはならなかったけど、食事はけっこうきつかった。骨付きの鶏肉をそのまま湯がいたのと、何の塩味もしないマカロニとかで食文化の違いが辛かったかな。」

第4項 3人の特徴

1) 幼少期：

表 22 幼少期の特徴

	飯島	根本	石井
バレエを始めたきっかけ	姿勢矯正のために母親に連れられた体験レッスンで、他の子より出来なかった悔しさからのめり込んだ。	音楽を聴いて踊るのが好きで、母親がバレエ教室に連れていき自らバレエをやりたいと言った。	小学校の同級生の母親に誘われたことがきっかけで、地元のバレエ教室に通い始めた。自宅から徒歩3分の距離にあり、友人と一緒に通えたことも大きな要因だった。特に強い動機があったわけではなかったが、結果的に生徒数も多く、質の高い指導を行う教室だった。
海外を意識したきっかけ	通っていたバレエスクールに留学経験のある先輩が多く、自然と海外を意識するようになった。	フルタイムでバレエを学びたかったことと、日本でバレエを職業にしても経済的自立が難しいと感じたことから、早期に海外でのキャリアを考えた。	小学校4年生の時にロシア・メソッドに出会い、本格的なロシア式のバレエ教育を受ける機会を得た。その後、複数のバレエ教室を経て、ワガノワで教師資格を取得した先生から「海外で本格的に学ぶべき」と助言を受けたことで海外を意識するようになった。
バレエへの熱意	自分の技術が他人より劣っていると感じ	幼少期から「踊ること」自体に強い楽し	さまざまなバレエ教室を渡り歩きながら学ぶ中で、本格的な

	た際、それを克服する努力に燃えた。	みと情熱を持っていた。	ロシア・メソッドに触れたことが転機となった。
上記以外の重要と 思える発言	幼少期からバレエが「自然に海外へつながる」と感じられる環境にいた	-	-

2) バレエ学校期：

1) 留学するまで

表 23 留学するまでの特徴

	飯島	根本	石井
留学先	ヒューストン・バレエ II (アメリカ)	フランス	ワガノワ・バレエアカデミー (ロシア)
留学しようと思った きっかけ・入学の経緯	YAGP ニューヨークファイナルで 3 位を受賞しスカラシップを得たことをきっかけに、バレエ学校のサマースクールに参加し、そのままヒューストン・バレエ II へ入った。	フランス在住だった先生が日本で行ったワークショップでスカラシップを獲得し、2 年間の留学を実現させた。	ワガノワ教師資格を持つ指導者の助言を受け、留学を決意した。また、ロシア人教師の同行でワガノワの公式オーディションを受け、17 歳から 2 年間バレエ学校へ通った。

2) 留学中

表 24 留学中の特徴

	飯島	根本	石井
留学中苦労したこと	スタイルや骨格の違いにコンプレックスを抱き、落ち込んだこともあったが、自分の個性を伸ばす努力を重ねた。	フランス語などの語学に不安を感じていたが、バレエを学べる環境が幸せで乗り越えられた。毎日バレエのことで悩み、どの程度成長すれば	身長や体型、基礎的な動きやラインの違いにも大きな壁を感じ、精神的に打ちのめされる経験をした。言語面ではバレエの指示は理解でき

		プロになれるかという不安を抱えていた。	たが、日常会話には苦勞した。また、食文化の違いが大きく、味の無い食事に適応するのが困難だった。
バレエメソッド	ロシア・メソッド (ワガノワ・メソッド)	ロシア・メソッド (ワガノワ・メソッド)	ロシア・メソッド (ワガノワ・メソッド)
上記以外の重要な発言	留学中はがむしゃらに取り組み、一生懸命さが苦勞を感じさせなかった。	幸せな環境でバレエに集中できた一方で、家族に負担をかけているという責任感が、プロを目指す動機の一つになっていた。	ホームシックにはなかったものの、環境の変化によるストレスは大きく、泣いて家族に話すこともあったが、気持ちを整理し、乗り越える術を学んだ。

3) 入団先

表 25 入団先の特徴

	飯島	根本	石井
入団先	・ヒューストン・バレエ団 ・チューリッヒバレエ ・K Ballet Tokyo	・ロイヤル・バレエ団 ・オーストラリア・バレエ団	・マリインスキー・バレエ
入団のきっかけ	ヒューストン・バレエIIを経て、ヒューストン・バレエ団に入団。	ローザンヌ国際バレエコンクールを通してロイヤル・バレエ団に研修生として入団。その後オーストラリア・バレエ団に移籍。	ワガノワ・バレエアカデミーを卒業後、マリインスキー・バレエ（提携バレエ団）に入団。

第6節 バレエメソッドと指導者育成プログラム

第1項 バレエメソッドの特徴

1) ロシア・メソッド（ワガノワ・メソッド）

ロシア・メソッドは、ロシアのワガノワ・バレエアカデミーで確立された指導法で国家的に定められたバレエ教授法であることがわかった。ポールドブラ（腕の動き）と脚のポジションの正確性や、強い筋力と柔軟性を培うための段階的な指導がなされており、エレガンスと力強さ、均整の取れた身体能力を重視するとされていた。共通した進級試験は確認されなかったが、ロシア・メソッドが厳密に取り入れられているワガノワ・バレエアカデミーでは8年間に渡ってカリキュラムが組まれていた。入学から卒業まで、どのような訓練をどういう順序でいかに行うか、学年ごとに細かく練られ定められた授業計画が立てられていることがわかった²³⁾。

2) R.A.D (Royal Academy of Dance)

R.A.D.の教授法及び試験は現在約80ヵ国以上で用いられ、毎年世界中の約25万人の生徒達が正式なR.A.D.の試験官により、「シラバス」に基づき試験を受けていた。16以上の段階に分かれたバレエ検定試験（Examination）と教師資格取得プログラム（Faculty pf Education）による各種プログラムを設けていた²⁴⁾。

3) フランス・メソッド（フレンチ）

フランス・メソッドのパリ・オペラ座バレエが発祥とされており、フランス国内のバレエ学校やパリ・オペラ座バレエ学校を通じて体系化されていた。例えば、パリ・オペラ座バレエ学校では毎年フランス・メソッドに沿った厳格な進級試験が設けられていたが、全国に共通する試験は確認されなかった²⁵⁾。

4) イタリア・メソッド（チェケッティ・メソッド）

イタリア出身のエンリコ・チェケッティが考案したチェケッティの教授法は、世界で最も古い教授法としてロシアや英国のバレエ教育に寄与していた。身体能力と年齢などに合わせ、21のグレードに体系化されていた²⁵⁾。

5) まとめ

バレエ歴 10 年以上、またはバレエ団所属経験があり、バレエ知識のある 4 人と協議した結果、以下のような表になった。(表 26) 共通点と相違点、その結果の妥当性については 4 人で協議した。

表 26 バレエメソッドの比較

メソッド	正確性	安定性	筋力	柔軟性	跳躍力	回転力	上半身	足さばき	表現力	しなやかさ
ロシア式	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	○
R.A.D.	◎	◎	◎	○	○	◎	○	◎	◎	○
フランス式	◎	◎	◎	△	△	○	△	◎	◎	△
チェケッティ式	○	◎	○	△	△	○	○	○	◎	○

第 2 項 世界のバレエ学校と日本のバレエ教室の比較

教育体制に関して、世界のバレエ学校は、プロフェッショナルダンサーを育成するために特化したカリキュラムを提供していた。特にロイヤル・バレエ学校、パリ・オペラ座バレエ学校、ワガノワ・バレエアカデミーなどのバレエ学校では、学年ごとに進級基準が明確に定められ、技術的な向上だけでなく芸術性の発展も重視されていた。一方、日本のバレエ教室では、統一された進級基準やカリキュラムが欠如しており、指導内容が教師個人の裁量に大きく依存していた。また、日本のバレエ教室ではバレエの技術レベルによるものではなく、学年や年齢でクラス分けされているケースが多くみられた。

指導方法については、世界のバレエ学校では、ロシア・メソッドや R.A.D. など、明確なバレエメソッドに基づいた体系的な指導が行われていた。これにより、生徒たちは一貫した技術を身に付け、世界中のバレエ団で通用する基礎を築いていた。一方、日本のバレエ教室では、複数のバレエメソッドが混在しており、一貫性に欠ける場合があった。また、トップレベルの技術指導は存在したものの、全体的にはプロフェッショナルダンサーを目指すための体系的な訓練が不足していた。

第3項 世界のバレエ学校の進級試験

世界のバレエ学校では進級試験のシステムが導入されており、その内容や特徴は学校ごとに異なっていた。表 27 では、パリ・オペラ座バレエ学校とロイヤル・ウィニペグバレエ学校で採用されていたシステムを比較してまとめている

表 27 世界のバレエ学校の進級試験

バレエ学校	進級段階	内容	評価
パリ・オペラ座バレエ学校	第 6 ディビジョン ～第 1 ディビジョン	・1 年に 1 回 5 月の学年末に進級試験が行われる。	・落第と判定されると留年ではなく退学となる。
ロイヤル・ウィニペグバレエ学校	1 年生～7 年生 (Level1～Level7)	・1 年に 1 回 6 月に進級テストが行われていた。 ・「バレエ」「モダン」「キャラクター・ダンス」(古典ダンス) などの種類のテスト	・進級試験と 1 年の様子を見て両方を加味して進級・留年・退学が決まる

第4項 ロイヤル・ウィニペグバレエ学校の進級試験の評価方法

ロイヤル・ウィニペグバレエ学校では進級試験が総合的な評価に基づいて実施されていた。2008 年時点の評価項目は、「芸術点」「技術点」「全体的な特性点」の 3 つのカテゴリに分かれており、それぞれの項目で詳細な評価基準が設定されていた。(表 28) これらの評価項目を組み合わせ、生徒の技術力と芸術性のバランスが総合的に判断し、その結果が進級や留年、場合によっては退学の決定に反映されていた。

表 28 ロイヤル・ウィニペグバレエ学校の進級試験の評価項目

評価項目	配点 (満点)	評価内容
芸術点	45 点	音楽性、タレント性、プロフェッショナルリズム、コーディネーション、スタイル、ポテンシャル、表現力、動作のクオリティ
技術点	45 点	ボディプレイスメント、筋力、エクステンション (脚の位置)、柔軟性、アンデオール (脚の外旋)、フットワーク (足さばき)、ボールドブラ (腕の動き)、アダージオ (ゆったりした動き)、ピルエット (回転)、アレグロ (早い動き)
全体的な特性点	10 点	クラシカルエステティック

第5項 指導者育成の方法

海外では、バレエ指導者の資格取得に向けたトレーニングコースが体系化されているのが特徴だった。例えば、前項で述べたロシア・メソッドは国家資格であり、ロシアの芸術大学や体育大学の特定の学科を卒業することが義務付けられていた。さらに、英国の R.A.D. は、指導者育成のための資格制度を整備しており、一定期間の講義や実技試験を経て資格を取得する仕組みを持っていた。一方、日本では、日本の国家資格や国際的に通用する指導者資格が存在せず、指導者の技術や教育能力がバレエ教室ごとの裁量に委ねられていた。表 29 は、公開されている世界の指導者育成と通信制で取得可能となっている世界の指導者育成プログラムにおける資格取得条件や期間をまとめたものである²⁶⁾²⁷⁾²⁸⁾。

表 29 バレエの指導者資格

メソッド	資格（国）	期間	条件
ロシア	国家資格（ロシア）	最低 4 年間	・ロシアで教員の国家資格を取得するにはロシアの芸術大学や体育大学を卒業する必要がある
ロシア	ペルミワガノワメゾット教師資格（通信制）	1 年～3 年	・国内外の義務教育修了者（15 歳以上） ・クラシックバレエを 5 年以上経験したもの
R.A.D.	Diploma of Dance Teaching（イギリス）	2 年	・3 年以上の世界主要なバレエ団でのプロ経験 ・3 年以上のバレエ教師経験
R.A.D.	Certificate in Dance Teaching（通信制）	2 年	・R.A.D. 試験のインターミディエートレベルの合格、またはそれに相当する技術と知識をし得していること ・18 歳以上であること
チェケッティ	チェケッティ・メソッド教師資格：ディプロマ・修士号・博士号	3 年～8 年	・各教師資格レベルに基づいた検定試験に合格すること ・18 歳以上であること

第6項 他競技との比較とバレー教育の応用

他競技の選手育成方法と指導者の育成方法について論じる。

1) 卓球：TKS25²⁹⁾

卓球では年齢や能力に応じた段階的なトレーニングプログラムが設けられており、基礎技術を習得する段階、応用的なスキルを磨く段階、競技力を向上させる段階を設けることで、選手が効率よくスキルを積み上げられる仕組みとなっていた。

TKS25は、佐藤司さんが考案した卓球指導プログラムで、多くのスイミングスクールなどの指導現場で導入されているプログラムを参考にしていた。このプログラムは、段階的な教育メソッドを参考に設計され、技術を25段階に分け、初級、初中級、中級の3つの階級に分類していた。初級では「グリップの正しい持ち方」や卓球台を使用せずに行う「ボール付き」や「壁打ち」などの基本的な動作が導入され、21級からはサーブやフォアハンド、バックハンドなどの具体的な技術を学ぶ段階へ進む仕組みとなっていた。進級基準が明確に設定されており、月1回の進級テストを実施することで、最短9か月で1級に到達できるプログラムとなっていた。

このプログラムの利点として、以下が挙げられていた

- 各選手のレベルを一目で把握できたため、指導メニューの設計が容易であった。
- 各自の習熟度をこまめに確認しながら、適切な指導が可能であった。
- 選手ごとに目標を設定しやすく、練習意欲を高める効果が期待されていた。
- 合格者には合格の証としてワッペンが授与され、モチベーションの向上に寄与していた。

2) サッカーのコーチライセンス

さらに、指導者の育成においても、他競技のサッカーでは、日本サッカー協会（JFA）が独自のライセンスを発行しており、国内のサッカー指導者にとって重要な資格とされていた³⁰⁾。表30は、JFAライセンスの種類ごとの指導対象やレベル、必要な講習日数、およびライセンス互換性を示している。この制度では、指導対象に応じた専門的な教育が行われ、各ライセンス取得には規定の日数の講習受講と試験合格が必要とされていた。

表 30 JFA のサッカーコーチライセンス

ライセンス種類	目的	講習日数	ライセンス互換性
Pro ライセンス	プロチーム及びプロ選手の指導ができる人材を養成すると同時に、日本の指導者のリーダーとなる人材を育成する。日本国内のプロサッカークラブで監督を務めるためには必須資格とされる。	62 日 + α	AFC Pro-Diploma
A ジェネラルライセンス	全国レベルの選手（主な対象は 18 歳以上）の指導ができる人材を養成すると同時に、地域・都道府県の指導者のリーダーとなる人材を育成することを目的とする。	16 日	AFC A-License
B ライセンス	アマチュアチーム及びアマチュアレベルの選手（子どもから大人）に質の高い指導ができる人材を養成すると同時に、C ライセンスからレベルアップし、全般的な基礎固めを目指す指導者を養成することを目的とする。	13 日	AFC B-License
C ライセンス	アマチュアチーム及びアマチュアレベルの選手（子どもから大人）を指導できる人材を養成すると同時に、これから指導者としての基礎を築こうとする指導者を養成することを目的とする。	8 日	-
D ライセンス	アマチュアレベル（子どもを中心）を対象にした指導者を育成すると同時に、子どもたちにサッカーの楽しさを伝えられる指導者を育成することを目的とする。	1 日	-

ライセンス種類	目的	講習日数	ライセンス互換性
キッズリーダー	10 歳以下の選手・こどもたちに関わる指導者・指導者で身体を動かすことの楽しさを伝える指導者の養成を目的とする。	1 日	-

第4章 考察

今回の研究では、世界のトップバレエ団に日本人が所属するためには、幼少期から特定のバレエメソッドに基づく指導が基礎技術と芸術性を育む上で重要であり、特に R.A.D. やロシア・メソッドといったカリキュラムがその後の教育への移行を支えることが確認された。留学はキャリア形成の大きなステップであり、語学や異文化への適応といった課題を乗り越える力が成功に直結することが示された。また、ローザンヌ国際バレエコンクールや YAGP は、スカラシップ獲得やネットワーク構築を通じて、プロへの道を広げるプラットフォームとして機能している。一方で、オーディション映像を自主的に送付することでキャリアを築いた事例もあり、自己発信の重要性が示された。今後、このようなダンサーを輩出するために、「幼少期の教育方針」「日本からトップダンサーを輩出するための要点」「留学後の指導」「他競技から学ぶ指導方法」について考察する。

第1節 幼少期の教育方針

バレエを習い始める時期は一般的に3歳から5歳ごろとされており³¹⁾、習わせて良かった習い事の中でも、ダンス（ダンス・バレエ・ヒップホップ）は2番目に人気の習い事として挙げられている³²⁾。しかし、この時期にバレエを始めた子供たちの多くは、小学校高学年頃には他の活動に興味を移し、進学を機にバレエから離れる傾向が見られる。この点を踏まえると、幼少期の教育方針には「プロを目指すための要素」と「バレエ以外の場面でも役立つ要素」の両方をバランスよく取り入れることが重要であると言える。

第1項 バレエメソッドを取り入れる事的重要性

プロフェッショナルなバレエキャリアを築くために、幼少期から特定のバレエメソッドに基づく体系的な指導を受けることは、一定の意義があることが本研究でも確かめられた。今回調査対象となったシンガポールバレエ所属ダンサーの経歴調査からも、この点が明確になった。アンケート調査によれば、半数以上のダンサーが幼少期に R.A.D. やロシア・メソッドで学び、その後バレエ学校に進学している。さらに、バレエ学校進学後は17人中11人が異なるバレエメソッドで学んでいたが、それでも幼少期に確立されたバレエメソッドでの基礎教育がプロへの道を支える重要な役割を果たしていた。

したがって、R.A.D. やロシア・メソッドに幼少期から触れる事的重要性を指導者は認識すべきである。これらの主要なバレエメソッドは、体系的なカリキュラムがあり、基礎技術の習得だけでなく、柔軟性や筋力をバランスよく養成し、段階的な成長を支える基盤となる。バレエの基本を体系的に習得できる。これらのバレエメソッドは、プロフェッショナルキャリアへの準備に有用であると考えられる。

さらに、大規模なバレエ団に所属するダンサーの大半が提携校出身であることが確認され、ロイヤル・バレエ団のダンサーのうち約 80%がロイヤル・バレエ学校出身、パリ・オペラ座バレエ団では約 70%がパリ・オペラ座バレエ学校出身、マリインスキー・バレエでは約 84%がワガノワ・バレエアカデミー出身であった。これらのバレエ学校は、それぞれイギリス・メソッド、フランス・メソッド、ロシア・メソッドに基づいた指導を行っており、各バレエ団のスタイルに適応したダンサーを輩出するシステムが確立されていることが示された。つまり、各バレエ団のダンサーの 70～80%以上が提携校のメソッドで教育を受けていることになり、バレエ団が求める技術や芸術性を獲得するには、幼少期から一貫したメソッドで訓練を受けることが重要であると考えられる。

一方で、日本でのバレエ教育をうけたダンサーは、幼少期にどのバレエメソッドで学習したのかが特定できない者が一定数存在しており、バレエメソッドを重視する文化が浸透していないことがわかった。先行研究や文献においても、基礎教育の「バレエメソッド」に焦点を当てた調査は限られており、日本のバレエ教育ではトップレベルの成果やコンクール結果に注目する傾向が強いことが指摘されている。しかしながら、YAGP の上位入賞者の出身バレエ教室をみると、講師が海外のバレエ学校でワガノワ・メソッドや R.A.D などのメソッドを学んだ経歴を有しているケースが多いことを踏まえると、プロを目指すためには、幼少期から特定のバレエメソッドに基づいた体系的な教育を受けることが不可欠であり、基礎教育の段階で確立されたバレエメソッドが将来的な成功への「近道」となると考えられる。幼少期から特定のバレエメソッドを取り入れることで、指導が個々の教師の技術や判断に過度に依存せず、バレエ教室内で教師の入れ替わりがあった場合でも、指導内容の一貫性を保つことができる考える。このようなバレエメソッドの導入は、安定した基礎教育を実現し、ダンサーの長期的な成長を支える環境作りに寄与すると考えられた。

以上より、日本のバレエ教育が世界で活躍するダンサーをさらに多く輩出するためには、幼少期の教育方針としてバレエメソッドの導入し浸透を図ることがその可能性を高め、これにより基礎教育の質が高まり、次世代のダンサーの可能性がより広がることに貢献すると考えられる。

第 2 項 他競技にも役立つ要素

幼少期の教育方針には、バレエの技術だけでなく、バレエ以外のスポーツや日常生活にも活用できる身体の使い方を取り入れることが、一定の意義を持つと考えられた。バレエで取得可能な身体の使い方は、子供たちの身体的能力を広範囲に育成し、バレエ以外の選択肢も視野に入れた柔軟な教育、他のスポーツに転向したとしても活かされることが期待できる。バレエのみと道を断定せずに幼少期の子供たちにこのような多面的なアプローチをすることは、長期的な視野で子供たちの成長を支えるものになると考える。

また幼少期のバレエ教育の一環として、栄養学や解剖学、語学教育を導入することで、生徒の成長を総合的に支援することも重要になると考える。特に、海外での活躍を視野に入れた指導では、語学や異文化理解の教育が必要不可欠である。研究で明らかになったように、多くの留学経験者が言語や文化の違いに苦労していることから、これらのスキルを幼少期から段階的に育成することは、ジュニアダンサーやジュニアアスリートの将来的な活躍を支える基盤となることを認識し、カリキュラムに取り入れるべきである。

このように幼少期の教育方針の見直しを行い、バレエメソッドを基礎に置きながら、バレエ以外にも役立つ要素を取り入れることで、より多くの子供たちがバレエに触れる機会を増やし、才能を開花させる環境を整えることが今後、日本でバレエ教育に関わる指導者に期待される役割の一つになると推察される。

以上より、幼少期の教育方針として、バレエメソッドを意識した指導、バレエ以外のスポーツや日常にも役立つ身体の使い方を盛り込むこと、バレエを支える栄養や解剖に関する知識、さらには語学力を高めることを含めるべきであることを提案する。

第2節 日本からトップダンサーを輩出するために求められる要点

第1項 コンクールの役割と可能性

ローザンヌ国際バレエコンクールや YAGP といった国際的な舞台は、ジュニアダンサーがプロキャリアを目指す上で重要なステップとして機能している。これらのコンクールは、技術力や芸術性を評価する場であるだけでなく、バレエ団やバレエ学校とのネットワーク構築を促進するプラットフォームとしての役割を担っている。日本のジュニアダンサーは、これらのコンクールで優秀な成績を収めることで、スカラシップやプロ契約を獲得し、国際的なキャリアを築く道を切り開いてきた。一方、コンクールを経由せずに、自主的に履歴書や映像を送ることでキャリアを築いたダンサーも少なくない。日本やシンガポールのダンサーの事例からは、このような積極的な自己発信がバレエ学校への進学やプロキャリアの形成に繋がる重要な手段であることが示されている。コンクールの成功はスカラシップや推薦に直結し、留学やプロへの道を切り開く鍵となるが、それに加えて多様なアプローチを柔軟に活用することが求められる。

また、国際的なコンクールでは、技術の完成度だけでなく将来性やポテンシャルも審査される傾向が強い。しかし、日本国内のコンクールは依然として技術の完成度に重点を置く傾向があり、この点が国内バレエ教育の課題といえる。日本のバレエ教育がコンクール偏重型である現状を改善するためには、短期的な成果を重視するだけでなく、長期的なキャリア形成に繋がる基礎力や表現力の育成を強化することが求められる。これにより、ダンサーたちが国内外で幅広く活躍できる可能性が広がるだろう。

第2項 提携校とネットワークの重要性

大規模なバレエ団では、提携校との密接なネットワークが形成されており、多くのダンサーがこれらのバレエ学校を経てバレエ団へ進む流れが一般的である。この関係性は、優れた教育を受ける機会を提供するだけでなく、卒業後のバレエ団入団への直接的なルートを構築する重要な要素となっている。特にロイヤル・バレエ団やパリ・オペラ座バレエ団、マリインスキー・バレエなどの大規模なバレエ団では、提携校出身のダンサーが過半数を占めており、バレエ学校とバレエ団の強固な連携が確認される。

一方で、中小規模のバレエ団においては、ダンサーの出身バレエ学校が多様である点が特徴的である。中小規模のバレエ団は、特定の提携校出身者に限定されず、異なるバレエメソッドや教育背景を持つダンサーを積極的に採用している。このような現象は、中小規模のバレエ団での活躍にはバレエ学校の幅広い選択肢が可能性を広げることが示唆している。また、多様な背景を持つダンサーが集まることで、バレエ団全体の芸術性や表現の幅が広がる可能性もある。したがって、大規模バレエ団では提携校を軸とした体系的な育成が重要である一方で、中小規模のバレエ団では柔軟性と多様性を生かした教育アプローチが求められると言える。

大規模バレエ団では提携校を軸とした体系的な育成が求められる一方、中小規模バレエ団では多様性を活かした教育アプローチが重要となる。しかし、どちらの場合においても、日本のバレエ教室が海外のバレエ学校とのネットワークを構築し、生徒が海外進出しやすい環境を整えることが急務である。このような取り組みは、国際的なキャリアを目指すジュニアダンサーにとって大きな助けとなるだろう。

第3節 留学とその後の将来を踏まえた指導

第1項 留学準備としての指導と支援

留学に向けた指導では、技術面だけでなく、文化的・社会的適応力を高める教育が重要である。語学の基礎教育に加え、異文化での生活スキルや自己管理能力を育成するカリキュラムを組み込むことが有効である。また、留学後のキャリア形成を見据えたアドバイスやネットワーク構築支援も求められる。これにより、ダンサーが国際的な舞台で活躍する基盤を築くことができる。

特に、留学先の文化や習慣に関する基本的な知識を事前に学ぶことは、現地での適応を円滑に進めるうえで欠かせない。例えば、日常生活に必要なマナーやコミュニケーションの仕方、社会制度についての基礎知識を身に付けることで、異文化環境への不安を軽減し、自信を持って新しい環境に臨むことができる。さらに、身体的な準備として、栄養学や健康管理

についての教育も重要である。これにより、異なる気候や食生活に適応し、体調を維持する能力を高めることが可能となる。

また、精神的なサポートも留学準備における重要な要素である。特に、異文化の中で孤立感やプレッシャーを感じる可能性があるため、ストレス管理やメンタルケアについての基本的な方法を教えることは、ダンサーが長期的に健康で充実した生活を送るための重要な一助となる。さらに、家族や指導者との円滑なコミュニケーションを保つ方法を学ぶことで、留学中の支えを確保することができる。

第2項 留学中のサポート

留学中のサポート体制を整えることも、指導者にとって重要な役割である。定期的に進捗状況を確認し、問題が発生した場合には迅速に助言を行う仕組みを構築することが求められる。例えば、オンラインを活用したカウンセリングや、指導者と生徒の交流を継続することで、ダンサーが孤立感を抱えることなく、学びに集中できる環境を提供することができる。

留学中には、新しい技術やバレエメソッドを学ぶことに加えて、生活面での課題が浮上することが多い。現地の言語の壁に加えて、異なる教育方針への適応、日常生活の中での困難などが挙げられる。これらの課題を解決するために、指導者がダンサーと定期的に連絡を取り、進捗状況を共有することは非常に有効である。また、同じ留学先にいる他のダンサーや、日本から留学している仲間とのネットワークの構築を促すことで、情報交換や相互サポートの機会を増やすことも重要である。

このように、留学準備から留学中に至るまでの包括的なサポート体制を整えることは、ダンサーが国際的な舞台で活躍するために不可欠である。指導者は、個々のダンサーの状況やニーズに応じた柔軟な支援を提供することで、次世代の国際的なダンサーの育成に貢献することができる。

第4節 他競技から学ぶ幼少期の指導方法

第1項 他競技の指導法からの応用

他競技の教育方法を参考にすることで、バレエ教育にも段階的で体系的な指導を導入し、ダンサーの成長を促進する可能性が広がる。他競技では、選手の身体能力やスキルを科学的に分析し、そのデータを基に効率的なトレーニングが行われている。

たとえば、卓球の「TKS25」プログラムは、このような科学的・段階的のアプローチを取り入れている。技術を初級、中級、上級の3段階に分け、さらに25の詳細なステップを設けることで、選手が効率よくスキルを向上させる仕組みを整えている。このプログラムは、選手のレベルを一目で把握し、適切な目標を設定する助けとなり、進級テストを実施することで

達成感を提供する仕組みとなっている。これをバレエ教育に応用することで、ダンサー個々の成長を可視化し、効率的な指導が可能となると考えられる。

一方で、現在のバレエ教育は、経験や感覚に頼る部分が大きく、科学的アプローチの導入が進んでいない。技術的な進化を促進するためには、こうしたデータ駆動型の指導法を取り入れ、段階的に教育内容を体系化することが求められるだろう。

第2項 指導者育成における資格制度の導入

他競技では、指導者育成のために資格制度が確立されており、指導の質を向上させるとともに、教育の基準を統一する役割を果たしている。たとえば、サッカーの JFA コーチライセンスでは、指導対象に応じたレベル別の資格を提供し、最上位の資格ではプロ選手やプロチームの指導が可能となる。この体系的な資格制度により、指導者の技術と知識を段階的に向上させ、競技全体の教育水準を底上げしている。

一方、バレエ教育における指導者資格は、R.A.D.やチェクッティ・メソッドなど一部の国際的なプログラムで提供されているが、日本国内での普及は限定的である。サッカーのような資格体系をバレエ教育に導入することで、指導者のスキル向上と教育の標準化を図ることが可能となる。さらに、資格取得過程で科学的な指導法や段階的トレーニングを学ぶことで、指導の幅を広がり、より質の高い教育が可能となる。

第3項 バレエ教育への応用と課題

他競技の成功事例に基づき、バレエ教育でも段階的なカリキュラムや科学的データに基づく指導法を導入することで、ダンサー個々の能力を最大限に引き出す環境が整備できる。TKS25のような段階的な進級基準や、JFA のサッカーコーチライセンスのような資格制度を活用することで、指導者と生徒の双方に明確な目標を設定する仕組みが構築可能である。

一方で、これらをバレエに導入する際には、既存の文化や教育体制との調整が課題となる。バレエ独自の芸術性や表現力を損なわずに科学的要素を取り入れるためには、各分野の専門家が協力し、柔軟かつ多角的なアプローチを模索する必要がある。これにより、日本のバレエ教育がさらに発展し、世界的な舞台で活躍するダンサーをより多く輩出できる基盤が築かれるだろう。

第5章 結論

本研究を通じて、ジュニアダンサーが世界のトップバレエ団に所属し、活躍するためには、幼少期からの体系的かつ質の高い教育が不可欠であることが明らかとなった。R.A.D.やロシア・メソッドのような体系的なカリキュラムは、基礎技術と芸術性の両方を育むうえで重要でありダンサーの成長を段階的に支える有効な手段であることが示された。また、日本のバレエ教育では、統一された進級基準や科学的データに基づくトレーニングの導入が遅れており、他競技の段階的な指導方法や資格制度を参考に、教育の効率化と指導者の質の向上を図る必要がある。

留学やコンクールといったステップも、プロフェッショナルキャリアを築く上で重要な役割を果たしている。特に、ローザンヌ国際バレエコンクールや YAGP などの国際的なコンクールは、スカラシップの獲得やネットワーク構築の場として機能しており、プロキャリアへの大きな機会を提供している。一方、コンクールを経ない自己発信によるキャリア形成も一定の成果を上げており、ダンサーに自己表現力とコミュニケーション能力を養う指導が求められる。

さらに、指導者の役割は、技術指導にとどまらず、語学や異文化適応力、自己管理能力などを育成する多面的な支援が求められる。指導者が世界のバレエ学校とのネットワークを構築し、生徒が国際的な舞台で活躍するための基盤を提供することも重要である。

今後はさらなる調査を通じて、効果的な教育モデルを構築することで、日本のバレエ教育を一層発展させ、より多くのジュニアダンサーが国際的な舞台で活躍することを期待する。

謝辞

本研究を進めるにあたり、多くの方々から温かいご支援とご指導を賜りました。ここに深く感謝の意を表します。

まず、研究指導教員である平田竹男教授には、広い視野と鋭い洞察力に基づき、研究内容の構築から論理的思考法、さらには物事の本質を捉える重要性に至るまで、多岐にわたりご指導いただきました。研究序盤で課題が曖昧だった際には、「何を明確にしたいか」「卒業時にどうなっていきたいか」と繰り返し問いかけてくださり、研究の方向性を確立する大きな助けとなりました。また、先生のご指導を通じて、指導と経営の両面からバレエに関わり、次世代のダンサーがより良い環境で成長できるよう支えたいという目標を持つに至りました。先生のご指導がなければ、本研究を完成させることはもちろん、バレエダンサーとしての現役生活を終えた後に進むべき道すら見出せなかったかもしれません。

また、中村好男教授、高橋義男教授、児玉ゆう子先生、畔蒜洋平先生にも、研究の各段階で貴重なご助言をいただきましたことを、心よりお礼申し上げます。中村教授からは研究の方向性を定めるうえでの具体的な示唆をいただき、高橋教授からは論文の構成に関する実践的なアドバイスを賜りました。児玉先生には論文の細部に至るまで時間をかけて丁寧にご指導いただき、畔蒜先生には研究序盤から公開審査会のプレゼンテーションに至るまで、多方面にわたり支援していただきました。

また、多忙なシーズン中にもかかわらず、アンケート調査やインタビュー調査にご協力いただいたシンガポールバレエをはじめとするバレエダンサーの皆様には、心より感謝申し上げます。皆様の率直で貴重なご意見が、本研究の基盤を築くうえで大きな力となりました。

さらに、大学院進学に際し後押ししてくれた家族、シンガポールバレエの芸術監督ならびに関係者の皆様、そして、現在所属する石井久美子バレエプロジェクトのメンバーの皆様にも、授業や研究を優先する私を快くサポートしてくださったことに感謝しております。

最後に、平田研究室 19 期の皆さんと学生修士の皆様にも心より感謝いたします。同じ目標に向かい切磋琢磨し、励まし合えた大学院生活は、私にとってかけがえのないものでした。皆様のお力添えがなければ、研究の完成も大学院での充実した生活も成し得なかったと感じております。

改めて、本研究に関わってくださったすべての皆様に、心から感謝申し上げます。

文献

引用文献

- 1) 海野敏. (2023). *バレエの世界史 -美を追求する舞踊の 600 年-*. 中央公論新社.
- 2) Opéra national de Paris. (2024). *Chronology*, Opéra national de Paris ホームページ. <https://www.operadeparis.fr/en/magazine/350-years/chronology/june-28-1669-birth-of-the-opera-academy>, (参照 2024-12-28).
- 3) Victoria and Albert Museum. (2024). “*The Origins of Ballet*”, Victoria and Albert Museum ホームページ. <http://www.vam.ac.uk/content/articles/o/origins-of-ballet/>, (参照 2024-12-28).
- 4) 海野敏, 小山久美. (2022). 日本のバレエ教育環境の実態分析『バレエ教育に関する全国調査 2021』基本報告
- 5) 一般財団法人谷桃子バレエ団. (2024). 一般財団法人谷桃子バレエ団 TOP ページ. <https://www.tanimomoko-ballet.or.jp/>, (参照 2024-12-15).
- 6) 東京バレエ団. (2024). 東京バレエ団ホームページ. <https://thetokyoballet.com/>, (参照 2024-12-15).
- 7) 東京シティ・バレエ団. (2024). 東京シティ・バレエ団ホームページ. <https://www.tokyocityballet.org/>, (参照 2024-12-15).
- 8) NBA バレエ団. (2024). NBA バレエ団ホームページ. <https://nbaballet.org/>, (参照 2024-12-15).
- 9) K-BALLET TOKYO. (2024). K バレエトウキョウホームページ. <https://www.k-ballet.co.jp/>, (参照 2024-12-15).
- 10) 新国立劇場バレエ団. (2024). 新国立劇場バレエ団ホームページ. <https://www.nntt.jac.go.jp/ballet/nbj/>, (参照 2024-12-15).
- 11) Herrera-Guzmán, Y. et al. (2023). *Quantifying hierarchy and prestige in US ballet academies as social predictors of career success*. Scientific Reports, 13(1):18594.
- 12) Kim, H., Tasker, S.L., & Shen, Y. (2022). *How to Persevere in a Ballet Performance Career: Exploring Personal Wisdom of Retired Professional Ballet Dancers*. Research in Dance Education
- 13) Roncaglia, I. (2010). *Retirement Transition in Ballet Dancers: "Coping Within and Coping Without"*. Forum Qual. Sozialforschung / Forum: Qual. Social Research
- 14) Walker, I.J., Nordin-Bates, S.M., & Redding, E. (2010). *Talent identification and development in dance: A review of the literature*. Research in Dance Education
- 15) Royal Ballet and Opera. (2024). The Royal Ballet and Opera ホームページ. <https://www.rbo.org.uk/about/the-royal-ballet/history>, (参照 2024-11-30).
- 16) Opéra national de Paris. (2024). Opéra national de Paris ホームページ. <https://www.operadeparis.fr/en/about/history>, (参照 2024-11-30).
- 17) Mariinsky Theatre. (2024). Mariinsky Theatre ホームページ. https://www.mariinsky.ru/en/company/ballet/history_ballet/, (参照 2024-11-30).
- 18) The Australian Ballet. (2024). The Australian Ballet ホームページ. <https://australianballet.com.au/about-us>, (参照 2024-11-30)
- 19) Hong Kong Ballet. (2024). Hong Kong Ballet ホームページ. <https://hkballet.com/en/meet-hkb>, (参照 2024-11-30).

- 20) Singapore Ballet. (2024). Singapore Ballet ホームページ. <https://singaporeballet.org/our-vision-mission/>, (参照 2024-11-30).
- 21) クラシックバレエガイド. (2023). ローザンヌ国際バレエコンクールの歴代日本人入賞者とその後. クラシックバレエガイド. <https://tsupate.com/lausannewinners/>, (参照 2024-11-30).
- 22) Youth America Grand Prix. (2024). YAGP Winners. <https://yagp.org/winners/>, (参照 2024-11-30).
- 23) MasterClass, (2021). *Vaganova Ballet Method: What Is the Vaganova Method?*, MaesterClass ホームページ. <https://www.masterclass.com/articles/vaganova-ballet>, (参照 2024-10-1)
- 24) Royal Academy of Dance. (2024). Royal Academy of Dance ホームページ. <https://www.royalacademyofdance.org/about-the-rad/>, (参照 2024-12-14)
- 25) Laura Di Orio. (2024). *Ballet: Method to Method*, Dance Informa. <https://www.danceinforma.com/2013/01/07/ballet-method-to-method/>, (参照 2024-10-1)
- 26) Royal Academy of Dance. (2024). Royal Academy of Dance ホームページ. <https://www.royalacademyofdance.org/about-the-rad/>, (参照 2024-12-14)
- 27) ロシア国立ペルミバレエ学校 日本校 (2024). ライセンス・進路. <https://permballet-japan.com/license/>, (参照 2024-12-14)
- 28) The Cecchetti Council of America. (2024). The Cecchetti Council of America ホームページ. <https://www.cecchetti.org/teachers/teacher-requirements/>, (参照 2024-12-14)
- 29) 佐藤司. (2017). 卓球初心者向け 25 段階の基本技術習得目標に関する研究
- 30) 公益財団法人日本サッカー協会. (2024). JFA ホームページ. <https://www.jfa.jp/coach/>, (参照 2024-12-25)
- 31) 講談社コクリコ. (2023). 子どもにバレエを習わせる 何歳からが良い? 年齢帯別の注意点など解説. 講談社コクリコ. <https://cocreco.kodansha.co.jp/cocreco/general/education/NzDDd>, (参照 2024-12-20)
- 32) Frankel. (2024). 子供に人気の習い事ランキング 2025 年版! 習わせてよかったのは? Frankel. <https://frankel.co.jp/column/ranking/>, (参照 2024-12-20)

参考文献

- 1) Cohen, S. J. (2018). *Dance as a theatre art: Source readings in dance history from 1581 to the present*. Princeton Book Company.
- 2) Garafola, L. (2005). *Legacies of twentieth-century dance*. Wesleyan University Press.
- 3) Warburton, E. C. (2024). *Recentring ballet for twenty-first-century dance education*. Dance Education in Practice.
- 4) 海野 敏・小山 久美 (2017). 日本のバレエ教育の実態および課題. 舞踊学, 40, 14-25.
- 5) 海野敏. (2023). バレエの世界史 -美を追求する舞踊の 600 年-. 中央公論新社.

- 6) Au, S. (2012). Ballet and modern dance. Thames & Hudson.
- 7) Ritenburg, H. M. (2010). Frozen landscapes: A Foucauldian genealogy of the ideal ballet dancer's body. *Research in Dance Education*, 11(1), 71-85.
- 8) 海野 敏, 高橋あゆみ, 小山久美 (2012). 日本のバレエ教育の発展と課題. *舞踊学*, 35, 13-32.